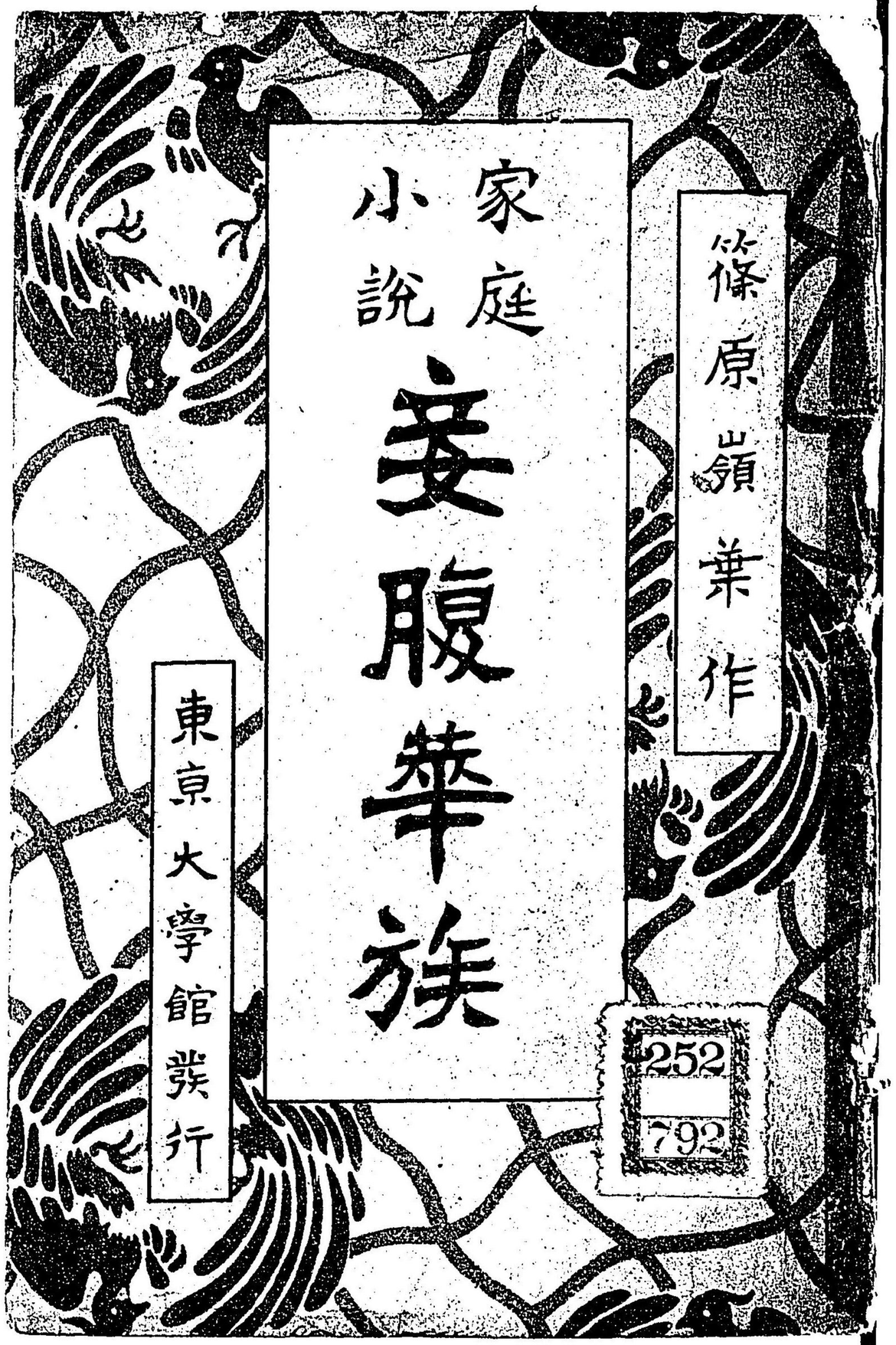


094052-000-0

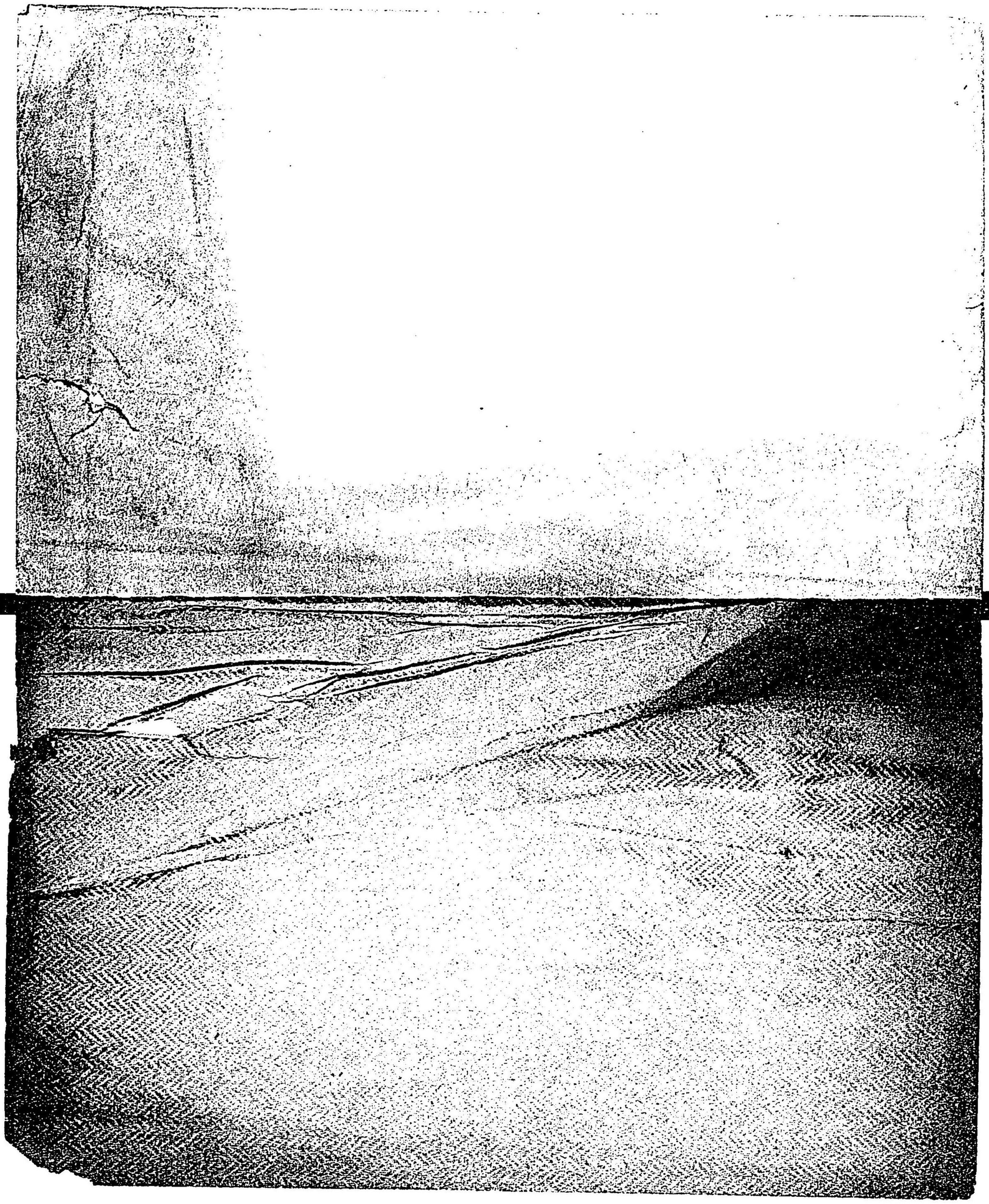
特11-383

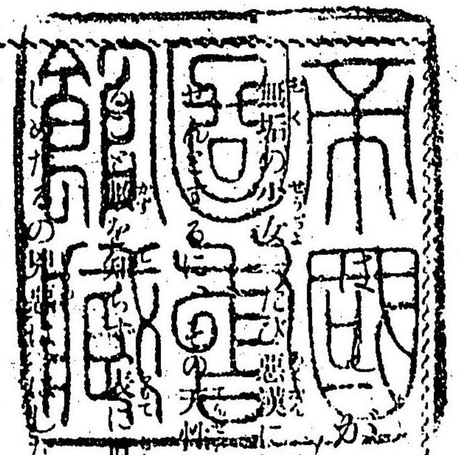
妾腹華族

篠原　嶺葉／著

M40

DBQ-1522





無垢の小女、悪漢に汚されて、心機一轉し、怨に報ゆるに怨を以てするの大件の鬼質を創とし、遊冶郎の魂を奪ひ、財を掠む、其情を盡して共に情死を圖り、男を水中に墜落せしめたるの顛末なり、陰謀を胸に貯へたる奸者に知られ、此の意氣相投じて夫婦となり、共に相扶けて不義の榮華を貪らんとす、憐む可し、世を怨みて閑居せる風流貴公子、一片の野心事の善惡を顧るに遑あらず、事の成否を慮かるの智なく、奸者の佞辯に迷はされて、大膽にも

明治
40 3 14
内交

宗家を顚覆せんとす、恐るべきし癖ひを風光に養ふの貴族、一度毒婦の美貌を見て魂天に飛び、身を亡ぼすの斧なるを知らず、名門滅亡の基たるを悟らず、奸夫と奸婦をして恣に毒爪を磨かしむ、硬骨家令あり雖もい後室の不貞を如何家從の墮落を如何。あゝ危い哉、脚色の經緯、描寫の巧妙宛然これ社會裏面の照魔鏡、

丁未三月

九穂散史識

特11
383

家庭小説

妾腹華族

篠原嶺葉著

山城國は宇治の里なる唯ある閑雅な土地に、敢て宏莊と言ふでは無いが、さりとて又此の界隈の里人の棲居とも覺えぬ、檜材に草葺の幽邃な一構がある。自然木の門柱には、雅な筆蹟で（御室雅敎）と記した標札が、風雨に吹曝されて、宛ら凸彫の如く文字のみ鮮に見ゆるのである。

主人と云ふは、二十歳の上を二つ三つ超えた、色の白い、氣品の高さうな、奈何眺めて見ても華族の公達か、若くは富豪の家庭に生長した、餘り浮世の波風を知らない令息かとも思はるゝ美男子で、里の人々は御室の若樣々々と呼びなして居る。

家族と云ふは主人雅敎の外に、五十前後の小綺麗な召使の婦人が一人居るばかり、里人から若樣々々と尊敬を拂はれて居る身分としては、餘りに約な暮である。

雅敎が此の宇治に移つてから既に六歲の春秋を送るが、何處に出勤めると云ふでもなく、朝な夕なに比較的廣やかな庭園を逍遙する外は、書齋に閉籠つて詩歌俳諧などの風流三昧に、日も足らない有樣である。

時は丁度皐月中旬で、霏々として降る五月雨は書齋の窓を訪れ、有繋に讀書癖の雅敎も思はず卷を閉ぢて、如何にも鬱陶に堪えられぬ如く

『よく降るね、實に可厭だ！』

と、呟きながら書齋の障子を開いて庭前を眺めると、糸の如き雨は綿々として何時降り止むべき樣子も見えぬ、折から池塘に咲き誇りたる燕子花の、雨に襯せながらも紫の色鮮かなるに、寸時見惚れつゝ、やがて障子をピタと締切つて元の坐に着けば、坐右に備へられた置時器は鏘々と五時を報じた。

『おや、もう五時だ！』

些つと時計を眺めて、先刻から頻に推稿した俳句に又首を傾げるのであつた。

『しよぼ濡れし袖の雫や、袖の雫や……奈何も下の一句が出ない、何か宗匠を驚かす程の名句は無いか知し……』

獨語つゝ、餘念なく俳想に耽るのであつたが、やゝ間すると、

『うむ、有た〳〵、實に名句があつた、これなら宗匠も必然賞めるに違ひない。』

云ひつゝすら〳〵と短冊に認め了つた時、間の襖を靜に開けて、次の室より恭しく、

『若樣、京都から宗匠が被來いましてございます。』

と、老婆が案内に及んだ。

『なにッ山川が參つた……直にこれへ案内致せ。』

『畏りましてございます。』

召使が退ると、程なく書齋に通つたのは雅敎が豫々指導を受けつゝある俳句の宗匠

山川孤舟である。

年の頃は三十三四、背のノッソリと高い、顔の細長い、苦味走つた、色の青白い、鼻下に美はしい髭を生した、如何にも風采の揚つた男である。身には黒紬の袷の上に鶯茶の一ッ紋の單羽織を着て居る。

見るより雅敎は殊の外の機嫌顔で、

『能く來て下れた、どうも此雨には殆んど閉口させられたる、實に能く降るぢやないか』

『誠に能く降りますことで、しかし益御健勝でお目出たう存じます。實は一昨日伺ひまする考へで出掛て居る所を來客に襲はれまして、漸く今日伺ひましたやうな次第、大層御無沙汰致して申譯がございません。』

と、鄭重に一禮した。

（二）

『山川、今日は久し振の事でもあり、殊に恁う遲く參つたのだから一泊して、寛々と斧正して貰ひたいが、差閊はないであらうね。』

と、雅敎が言へば、

『はい難有うございまするが、明朝大坂まで參る約束になつて居りまするで、御詠草を拜見致しまして、終列車で歸るやうな事に致したうございます。』

『然うか、然う云ふ約束があつて見れば止を得ない、それでは先づ句を見て貰つて、それから緩りと話す事に致さう。』

『嘸かし御名吟が澤山にお出來なすつたでございませう。』

『イヤ非常な名吟ばかりが澤山出來て、定めて宗匠も驚くであらうと、君の來るを首を伸して待つて居たのだ、ハ、、、』

快活に笑ひながら手文庫の中から、詠草を出して渡すと、山川宗匠は一目見るより、

『これは〳〵、五月雨百句ですか、隨分お吟になりましてございますな、能く拜見致しませう。』

と、仔細に目を通して、撰るべき句には一々點を施した後、

『恁う申すと誠に失禮でございますが、私が始めて拜見致しました頃は、兎角主觀的にお詠になりましたので、奈何も趣味が少ないやうに思はれましたが、もう近頃では天明頃の先哲の句を讀むやうな心が致して拜見致します、殊に今日の御句などは、到底未熟な私どもの想ひ及ばん名句が澤山に見受けられます、僅か一年あまりに恁うも御上達なさると云ふは、眞個御天才の然しむる所だと存じます。』

『イヤ〳〵まだ迚も句らしい句は詠めないが、しかし自分ながらも少しは調子が取れて來たとは思ふのだ、此分で研究を重ねたら茲二三年も經つたら、どうにか俳

句らしいものが詠めるだらうと思ふ、御足勞でも今一二年御指南が願ひたい。』

『イヤどうも若樣には恐れ入りました、大抵な者なら此位の名吟が出來るやうになりますと、忽ち立派な宗匠にでも爲り澄した意で、それなりけりに研究を廢める人が先づ十人の九人でございます、しかるに此上兩三年研究をすると有仰るは、唯々感服の外はございません、及ばずながら共々研究致しまするでございます。』

かゝる談話の中に、小淡泊した肴が三四品とサツポロビールとが運ばれた。雅敎は手づから瓶を取つて

『サア何にも無いが、君の好なサツポロビールだけが饗應だ、一つ酌を致さう……

……』

『伺ひます度毎に御馳走に預りまして、誠に恐縮致します、折角の思召でございますから無遠慮に頂戴致します。』

と、コツプを手にして泡だつビールを溢るゝまで受けて、息をも繼がず呷と嚥み干

した、それより面白可笑打語らひながら、やゝ寸時は酒宴に時を移したが、互に陶然とした頃山川はさら〳〵と一句を記して雅教に進め、

『私も一句浮びました、御添删をお願ひ申します。』

（三）

雅教は山川宗匠が得意相に示す句であるから、定めて金玉の名吟であらうと、俳句に熱心なだけ喜び勇むで見らるゝと、豈斗らんや

時は今天が下しる皐月かな

と、彼の弑逆の罪人を以つて、三日天下をもつて唄はれた日向守光秀が、己が心中を表現して當時の宗匠紹巴に示した句が、其まゝ記してあるから、扨は山川が酒興の上の戯事と合點して、哈々と笑ひながら、

『これは宗匠に旨く一杯食はされた、豈夫と思つたのは私が不覺だつた、ハ、、、、

しかし光秀は確に英傑の良將軍であつたに違ひないと、此句を思ひ出す毎に聯想するよ、實に旨く詠むでるぢやないかね。』

と、云ふと、山川は其辭を待受けて居たと云はぬばかりに、

『では、貴方も此句はお好だと見えまするな、然うでございませう、然うなくてはならない理でございます、私も大方御意に適ふであらうと存じまして、態と此句を御覽に入れたのでございます。』

と、意味ありげに云へば、雅教は怪訝な眼色で、

『それは又奈何云ふ理で、態と此句を私に見せたのだ！』

『奈何云ふ現と云ふ事もございませんが。憚りながら若様の理想の句かと存じました。』

『なに、これを私の理想の句だと申すか、』

『はい、左様の愚考致しまして』

『奈何して私の理想の句と申すか』

問はれて山川は、嘸かけたビールを呼と空け

『恁う申すと酩酊して申上げるやうに當りまするが、日向守の句を貴方の理想の句と申し上げたに就ては、深い理由があるのでございます、と申すは外でもございませんが、これまで一年有餘の間お詠みになつた句を拜見致しまするに、何か御心中に非常な鬱勃がお在なさる御様子が、絶えず句の上に現はれて居りまする、恁く申しますれば易の判斷めいて可笑く思召すかも知らないですが、これは周易でも何でもございません、眞個多年俳句を研究致しました經驗上から得た實觀を申し上ぐるのでございます。何か若様には容易ならない御不平がお在なさいますやうに、懼りながら察し上げまするが如何でございます、大地を打つ槌は外れましても、此の想像は恐く的中であらうと存じます。』

云つて、雅敎の容子如何にと密と顔を見上げた。

すると世事に馴れない雅敎は太く感服した様子で、

『私は何の氣も注かずに咏むだのだが、宗匠の目に留まるやうな、不平な句があつたかね。』

『それや貴方恐ろしいものでございます、思内にあれば色外に表るゝで、貴方は何の氣もなくお詠になつたのでございませうけれど、滿々たる御不平がチヤンと句の上に表れて居ります、論より證據既に今日の御句の中にも有るやうに存せられます。』

云ひつゝ、詠草を取上げて、

『御覽じませ、この（しよば濡れし袖の雫や皐月晴）の御句などは、一面から見まするとと、五月雨のために飽々して居たのが、晴たために心まで晴々としたと云ふやうな意味に見えまするが、又一面から見まするとと、地へ難き不平のために、初中終涙に袖を濡らして居つたのが、其不平が晴たやうな意味にも見えまする。』

『なる程然う云はれて見れば、如何にも非常に愁むべき境遇に沈むで居るものゝ詠むだやうな句に見える。』

と、今更の如く其句を幾度か繰返して讀むで見るのであつた。

（四）

山川宗匠は得たりこばかり、

『此以前伺ひました時の御句に（やんがては雲井に啼かん籠雀）と云ふがございましたが、彼の句などは奈何拜見致しましても御境遇をお詠みになつたものゝやうに感ぜられました。恁う申すと誠に失禮ではございますが、私は若樣の御心中の御不平は略存じて居りまするゆゑ、一屠句の上に就きましても其の感じが深いのでございます。苟にも日本の貴族中での門閥家と云はるゝ御室侯爵家に生れながら、かゝる草深い片田舎に蟄居なさるは、嘸人に明されない御事情がお在りなさるのでございませうけれど、御心中の御不滿は深くお察し申します。』

と、如何にも親切らしい調子で同情を表した。寔に此の御室雅致と云ふは、公卿華族の中の利者と呼ばれて、威權おさ〳〵貴族中を厭倒した侯爵御室雅經の妾腹に擧けられた兒で、男子と云ふは正腹に擧けられた兄の爲雅と二人きりで、外に一人の露子と云ふ妹があるばかりである。

しかるに母なる人は雅致が十一の秋病のために現世を去り、其後は妾腹ながらも御室家の二男と云ふので、兄の爲雅と其に學習院に入學して何不自由なく勉學しつゝあつたのであるが、今より七年以前父なる雅經侯が胃癌を病むで冥府に逝かれたゝめに、兄爲雅が家督相續者になると共に、未亡人三輪子の意見として、僅か五萬圓の金子を與へて殆んど絶縁の姿でこの宇治に移住せしめたのである。何故かゝる片僻な土地に居住せしめたかと云ふに、御室家が以前京都に居た頃より此の宇治には少なからぬ土地を所有して居つたゆゑ、此處に少の屋敷を與へたのである。

かゝる憐むべき境遇に沈められた敎は、悲憤の涙を零しながら、亡き母に召使れて居たお末と云ふ老婦を連れ、父の逝去した翌年此の宇治に移つたのである、それゆゑ今日では御室家から與へられた五萬圓の金子を信用ある銀行に預けて、そが利子を命の綱に燃ゆる不平を忍びつゝ、不愉快なる閑日月を送つて居るのである。

雅敎は山川宗匠が同情ある辭に、堪へ難き不平はむら〳〵と起つて、

『何所から然ういふ話を聞き出したか知らないが、君が私の境遇を知つて居るなら今更隱す必要もないから打明けて聞かせるが、眞個君が想像の通り六年以來、云ふに云へない不愉快な年月を送つて居るから、それがために自分では然ういふ心で詠む理ではないけれど、自然と句の上にまで表はれて來るのであらう、思内にあれは色々に表はるゝと、實に恐ろしいものだね。』

『……如何でございませう、立入つた事を申上げるやうでございますが、其の不愉快な事情を悉皆とお打明け下さる理には參りませんか、一方ならない御愛顧を受

けました此の孤舟、及ばずながら若樣のためなら一命を捨げても盡しまする所存でございます。』

『それほどまでに私を思ふて下れるなら、何も彼も打明けて話すから、必ず口外して下れては困るぞ。』

『何の口外など致しませう、どうぞお聞かせ下さい。』

と、グッと一膝進み寄つた。

（五）

雅敎はやゝ聲を潛めて山川に對ひ、

『君が云ふ如く、眞個私は御室侯爵家の二男に生れたのだが、父上が逝去せらるゝと共に、棲馴れた東の空を跡にして、かゝる遠隔の片山里に住居する身の上となつたのである、しかしこれには種々の情實が纏綿して居るのだ、それは外でもな

い私は御室家の二男には相違ないけれど、妾腹に生れた悲しさには、父上御存生の頃は兄と少しの階てもなくて、同じやうに愛されて居だけれど、私を生むだ妾と云ふは私が十一の時に死くなつて、今は現世に居ないが、非常に容貌が美しかつたので、父上の寵愛も一方ならぬ所から、正妻に當る現今の母上が嫉妬を起されて、始終家庭に風波が堪へなかつたさうだ、私は幼少の時分で何にも知らなつかたが、人の風評に聞けば私を産むだ妾の病と云ふのは、表面は病死と云ふ事になつて居るが、其實は正妻たる現今の母から毒殺されたと云ふ事である、然う云ふ在様であるから、母の私に對する態度は、父上の目前でこそ兄と變りもなかつたが、諺にも云ふ如く、坊主が憎ければ袈裟さでゞ、私の母たる妾に對する恨は私の身に及ぼして、陰では隨分冷な待遇をされた事も覺えて居る、それやこれやの事情からして、父上が逝去された翌年であつた、今の御室家の財産から云へば、半ヶ年の收入にも足りない僅かばかりの金子を下れて、這麽片山里へ遠隔されて了つたのだ、それあ私だつて言ふべき道理を知らんちやないけれど、母や兄の云ふ事を左や右と爭ふては濟まないと、云ふがまゝに、爲るがまゝに此方へ移るには移つたけれど、一生此麽片田舎で朽果て了ふかと思へば、實に口惜しくもあり、腹も立つ、この六年間と云ふものは、唯の一日だつてこれは愉快と思つて送つた事はありあしない、だから俳句でも研究して見たら、少しは胸中の不平を忘るゝ事もあらうかと、君を煩らはすやうな事に立至つたのだ、不愉快と云ふは先づ恁う云ふ理由なんだ。』

雅敎が語り了ると、山川は四邊に心を配つた後、

『いや、大抵那樣御事情であらうと想像致して居りました、しかしまあ能く考へて御覽なさい、何程義理ある母上なり兄上なりの仰せとは云へ、御父上が御健在で被在れば子爵なり男爵なり立派な貴族の肩書をもつて御分家のなる御身分であり ながら、在に効ない平民と爲り下つて、所もあらうに此麽邊僻な土地に御住居な

さると云ふは、昔で申せば島流同様でございます、かゝる虐待を受けながら默つてお在でなさると云ふは、云はゞ金剛石を土の中に埋めたも同様、こんな惜い事があるものぢやありません、能くもこれまで御辛抱なさいました、他人の私が承きましても思はず拳を握るほどでございますから、貴方の身では嘸や殘念だつたでございませう、此上は憚かりながら此の孤舟が命に替えて、必然貴方が世に出なさる樣に計らひます、決して快々なさいますな。』

『君の志は嬉しいが、世に出る途があるであらうか。』

『貴方が私を御信用下さつて、萬事をお任せ下されば、必度貴方を御室家の主人公に爲てお目に懸けまする。』

（六）

意外なる山川が辭に雅敎は四方に心を配りながら

『ナニ此の雅敎を御室家の主人公に？シテ又それは奈何して斗らうか。』

『其の策略と申しまするは、斯樣でございまする。』

と、側にあつたる用箋に、何事かスラ〳〵と記して示した。

『すりや、あの兄上を！』

『モシ聲がお高うございます……ナお解りになりましてございませう。』

と、手早く其書付は揉丸めて、有合ふ火鉢の火に投じて、扨辭を改め、

『貴方の御決心次第で必然成功させて御覽に入れますが、御決心は如何でございます、』

雅敎はやゝ寸時思案に沈むで居つたが、何となく不安の樣子で、

『しかし、旨く行り遂げられるてあらうか、旨く成功さへするなら這麽喜ばしい事はないが、若も失敗した曉には容易ならない事件になるからね。』

『若も成功爲なかつた曉は、貴方ばかりぢやございません、第一私の身が大變でご

ざいます、しかしながら鹿を追ふ獵師は山を見ずで、末の末まで案じた日にあ迚も大事は爲し遂げらるゝものぢやございません、まあ〳〵御心配なさらなくとも斷行すると云ふ御決心が着きましたら、萬事は此の孤舟が方寸にございます、誓つて成功致させまするから、御心配は御無用でございます』

『君がそれほどまでに云つて下れるなら、萬事君に任せるから宜からうやうに斗らつて下れ、しかし吳々も頼むで置くが必ず輕匆な事をして中途で失敗せんやうに注意の上にも注意を加へて行つて下れ。』

『宜しうございます、其御決心を承はりました上は、命に替えて成功させまするがしかし首尾克成功して貴方が侯爵家の主人公にお坐りなすつた曉は、何卒其勳功にめで〻侯爵家の家令として、永くお側にお召使をお願ひ致したうございまするが、此儀を御承諾下さいませうか。』

『それは申すまでもない、私が御室家の主人公となつた上は、君が望は如何なる望でも協へて遣はす。』

『その御一言を承はつた上は、此處一年と經たない中に必然望みを仕果せます、どうぞ樂しむでお待ちを願ひます。恁う事が極りました上は、互の健康を祝するため改めて一盞献じませう。』

と、コップを杯洗に清めて雅敎に雅じた。雅敎も同じくコップを山川に差して、いづれもビールを盈々と注いで、

『ブローヂット。』

カチリとコップを合せて呷と嚥み干した。同時に時計が午後十時を告げた。

山川は驚き顏に、

『オヤもう十時でございます、遲々して居ると終列車を外します、では今日はこれでお暇申します、ア、好い心地に頂戴致しましたので非常に酩酊致しました。』

『どうだ一泊して明朝一番で歸つては……』

『ハイ難有うございますが、先刻申上げました大坂行の一件がございますゆゑ、今日は失禮致しまする、其内近日伺ひまして寛りとお邪魔致します。』

と、暇を告げて停車場を差して急ぐのであつた。

いつの間にやら五月雨も降り休むで、十日あまりの月は雲の絶間々々より輝くのであつた。

（七）

山川孤舟は、打續いた雨天のために險悪を極めた里路を、日頃から胸に企謀むだ非望を打明けたのと、ビールの酩酊とに、得も云はれぬ愉快を覺えて、傘を隻手に、一歩は高く一歩は低く、踉々としてやゝ三十分の後宇治停車場に近いた時、消魂しい一聲の滝笛を餘波に下り列車は今停車場を離るゝ所であつた。思はず七八歩駈け出して見たが、列車は早くも煤煙を虚空に流して瞬く間に數丁の前に進行したので

『吁々僅の違ひで到頭乗遅れちやつた。』

と、忌々しげに呟いて、列車の行力を眺めつゝ路上に突立つた。

『こんな事なら、猶且御室の家へ泊つて一番に乗つた方が餘程智恵だつた。と云つてあれ程親切に留て下れたを、強情に歸りかけて、今更滝車に乗遅れましたからと引返へすも切腹だ、エ、まゝよ此處まで踏出したからには、幸ひ雨も止ぬだし、川風に酔を醒しながら宇治川堤をブラ〳〵と徒歩つて歸るも面白からう、然うだ、然うだ。』

と、我に問ひ我に答へて着物の裾を端折つて、スタ〳〵と歩み始めたが、程なく宇治川堤に出たので、彼の雅教を唆かして御室侯爵家を横領せんとする悪計に就て、左や右と思案を回らしつゝ歩む中不斗行方に當つて幽に人聲が聞こゆるので、ハテ不思議な事もあるものかな、かゝる深夜に同じ堤を行くは、我と同じく滝車に乗後れた人ではあるまいかと、眸を凝して眺めると、生憎月が雲に呑まれて定には見

えぬが、どうやら男女の二人連で此方に進むで來る樣子である、偖は夫婦連の旅人かさなくばお安くない道行筋かなど思ひながら、尙も歩み續けて居ると、件の男女は磯と堤の眞中に立留つて動く樣子もない、山川はツイ好奇心に驅られて、唯ある道端の柳の蔭に身を潛ばせ、男女の擧動を眺めて居ると、兩人共兩の袂へ頻に小石を入れる樣子であるから、ハ、ア偖は懇が任意ならんとか何とか云ふ所から、現世で添はれぬから冥府でと紋切形の情死だね、ヨシ〳〵奈何云ふ愁嘆場を演ずるか、行る所まで行らせて置て、イザと云ふ所で救けてやらうと、尙も透して眺めて居ると、男は女を抱き締めて、

『お君、能く顏を見せて下れ、これが互に顏の見納めだ。』

云ふも涙の曇聲。女も男の顏を瞻仰げ、

『長さん、私にも能く見せて下さいな。』

と、寸時は抱き合つたまゝ惚々と顏を見合つて居たが、

『いつまで見ても餘波は盡きない、ヒヨツと他人に見付かつて邪魔をされてはならぬから、一時も早く……』

男が促せば、女は涙の顫聲で、

『長さん、必ず冥府に行つても見棄て下さんな、三途の川や死出の山とやらも、どうぞ手を取合ふて越して下さい、これが臨終のお願ひでございます。』

『何の見棄て宜いものか、必ず心配しないが宜い。』

と、泣く〳〵手を取り合ふの滔々と物凄じい響を傳へて流れつゝある、宇治川の岸を降つた。

（八）

山川孤舟は柳の下に身を縮めて、息を凝して尙も男女の爲ん樣を見て居ると、兩人は岸に立つて凄じい勢を以て、滔々と流れつゝある宇治川の急流に對して、暫し水

面を眺めて居つたが、男は決心した如き調子で、

『サアお君、西方を拜むで、後を取らないやうに緊乎と抱き合つて飛び込まう、覺悟は宜いか。』

『あい。』

と、哀な聲で答へて西に向つて手を合すのであつた。男も同じやうに口に何やら唱へつゝ西に向つて掌を合せた。

此の刹那、此の瞬間、女は何と思つたか滿身の力量を纖弱き腕に罩めて、一心に唱名しつゝある男の背後から、ズドンとばかり突倒した。

不意を喰つた男は何條堪るべき、眞逆倒に宇治の急流に陷つて、其まゝ生死も知れずなつて了つた。

有繋大惡黨の山川孤舟も、この大膽不敵なる毒婦の振舞には心密に舌を卷き、先刻より兩人が投身する時は、躍り出て救はんと浮腰になつて待構へた勢も何處へやら

呆氣に取られながら尙も樣子を眺めて居ると、女は敢て狼狽する容子もなく、水煙の高く上つた川の中を覗き込み、四邊を憚る低調子、

『モシ長さん！、本當にお前さんは御念の入つたお心良だね、此のお君さんに一緒に情死して下れんかなんて、あんまり目先が見えなさ過ぎる、お前さんのやうな男でも、伏見で名高い近江屋の若旦那と知つたればこそ、可厭々々ながらも我慢して、甘い文句で鼻毛を讀むだは、纏つた金子が欲しさの慾の上、それに何ぞや僅か千か二千の端金を浪費つたとて、親から勘當世間に不義理、揚句の果が氣の弱い情死沙汰、憚りながら此のお君さんは、お前さんのやうな意氣地なしに、お交合で棄てるやうな、那樣安ッポい生命はお生憎と持合せがありませんよ、お前さんは此のお君さんを唯の女とお思ひだらうが、姫樣お君と綽名を博つた阿婆擦女、それとも知らずと嬌笑と笑つた笑靨の中に、箝り込むだはお前の不覺さ。とサア恁う云つたら定めし腹が立だらうが、惚た女の優しい手で、突落したのだか

ら、三拜九拜喜んで有難く成佛するが宜い、それとも殘念無念と思ふなら、古い文句だが化て出るなと取付なと、其處はお前の量見次第さ、私はこれからお前さんから卷上げたお金子をもつて、好た情夫でもこしらへて、思ふ存分樂しむかち十萬億土の奈落から、指を咬へて御覽なさい。』

と、云ひ了つて莞爾と笑ひ、袂の小石をガラ〳〵と、塵打ち拂ふて悠々と、岸より堤の上に、其まゝ元來た道に急がんとする時、

『モシ、姐さん、些とお待ちなさい。』

不意に背後から呼び留められて、かゝる深夜、かゝる雨の夜、豈夫に人の居るとも思はなかつたお君は、ハッとばかに度膽を拔かれたが、有繋に毒婦の然あらぬ体で、

『お呼びなすつたは私ですか。』

と、振向けば、

『然うさ、四方に人が居なけりやあ、まあお前さんの事だらうよ。』

此時、今まで雲に隱れた月は鮮かに兩人を照らした。呼留たは云ふまでもない山川孤舟！月の明にお君の顏を見れば、文金に結ひ上げた綠の髮の艶に、實にや貴人の令孃とも見ゆる花の容貌、年齡も十九か二十歲？

（九）

お君も、不安ながら弱味を見せじと

『何か御用事がお有んなさるんですか。』

と、二足三足後戻、其人の樣子を見れば、背のスラリと高い、色の白いキリ〳〵と引締つた男子らしい顏で、月はありながらも夜目で確とは分らないが、頭に　土耳其形の帽を戴き、身には黑地に着物に羽織を着て、年齡も三十位。

山川は、其顏を凝乎と眺めて莞爾と笑ひ、

『なあに、用事があると云ふ理ちやないが、若いに似合はないお前さんの度胸に惚れて、顔が見たさに呼び留めたと云ふ理さ。』

『では今の様子を御覽なさいましたか……然うですか、娘の癖に生意氣な所爲をして、お恥しうございます。シテ貴方は何方でございます。もう今の様子を見られたからには、假令貴方が鬼であらうが佛であらうが、未練に逃げ隱れは致しません、煮て召すとも燒いて召すとも御存分になすつて下さいまし。』

と、沈着拂つて嫣然と笑ふた妖艶さ。

『イヤ宜い覺悟だ、己に見られたは運の盡き、惡事を働いた天罰と諦めて、尋常に繩にかゝるが宜い、とさあ恁う云つたら色も香もない殺風景だが、豈夫那様野暮を云ふ男ぢやないから安心するが宜い。だがお前さん一体これから何處へ行きなさる積だ。』

と、問ひかけた。

強くは云つたものゝ、若や我身の惡事を探る警吏などではあるまいかと、一方ならず氣を揉むだお君は、騷立つ胸を漸く撫で下し。

『豈夫とは思つたものゝ、年貢の納め時か來たかと、實は吃驚致しました、が粹な貴方のお辭で辛と胸が沈着ました。御寛の通りの阿娑摺女、何處へ行くと云ふ目當もありませんが、どうせ此邊でマゴ〳〵爲ても居られませんゆゑ、これから暫く時く京都にでも行つて、順しく何處かへ潜んで居やうかと思ひます。』

『なる程旨い寸法だ、シコタマ金子を捲き上げて、邪魔になる奴を片付けた上、これから好た情夫と、京都の空で思ふ存分遊ぶなんかは、眞面目な奴等の夢にも見られぬ極樂世界で、ならう事なら男冥利に少しの間でも那様境涯に肖りたいものだ。アハ、、しかし京都は何方へ行きなさるか知らないが、南禪寺の片邊で俳句の宗匠と聞きなさりあ、大抵直に分ります。これを御緣に御夫婦連で些と遊びにお出でなさい、面白い浮世譚でも爲ませうよ。』

『ホ、、、常談にも程がございます。なんで私に情夫なんかありませう、先刻お聞きになつた通り、これから這麼阿婆摺女でも敵手になつて下れる人があれば、探して見やうと思つて居ます。何處かに似合の方でもありましたら、お救け序に御周旋をお願ひ申します、では旦那もこれから京都へお歸りでございますか……

……ではどうぞ、お可厭ではございませうがお連なすつて下さいませんか。』

『一緒に歩行いて怒る人さへ無かつたら、是非一緒に歸りませう……ヲヤ又點々降り出した、サア可厭ではあらうが此傘の中に入りなさい。話ながら歸りませう……

……初心らしい何の遠慮が入るものか。』

と、グツとお君の手を携つて、相合傘に歩み出した。

（十）

『まあ貴方眞個奥樣は被在らないんですか、私道々然う有仰つたけれど、必然お欺

しなさるんだと思つて居ましたの！』

安心した如き調子でお君が云へば、

『なんで嘘言なんか云ふものか、眞們この通り耳の遠い備婆と二人きりだ、これで疑ひは霧れたらう。』

云つて其の顏を見れば、

『……』

何とも云はず、唯ニコ〳〵と笑ふて居る。

『ところで昨夕道々話した一件だがね、君さん定めて可厭だらうね。』可厭なら强ひてと云ふ理ぢやないが、可厭でなかつつら承知して下れると、寔に願つたり協つたりだ、まあ能く考へて返辭を聞かして下れ。』

お君は躊躇する樣もなく

『私昨夕寢てから考へましたが、私のやうなヤグザ女でも世話をして遣らうと有仰

る御親切がありますなら、こんな結構な事はございませんけれど。』

と、一寸言ひ淀むで、

『昨夕のやうな大それた事を御存じなんですから、必度お可厭になるは知れて居ますゆゑ、それを心配致しまして……』

密と山川の顏を見れば、

『昨夕の事……それが心配だ、ハ、、、、昨夕の事なら何も心配なんかする事はない私がお前さんに女房になつて下れと言ふのも、昨夕宇治川堤の手際を見て、お前さん　度胸に惚たからだ、あの手際を見なかつたら假んばお前が何程美しい女でも、一生速添ふ女房には眞平だ、お前さんの方からどうぞ山川さんと持掛けても平詫りに御免蒙むる、アハ、、。』

お君は怪訝な顏をして、

『それはまた奈何云ふ譯でございます？奈何いふ理由で貴方ほどの方が、私のやうな根性の曲つた女を、それほどまでに親切に云つて下さるんです。』

『なる程こりや然う疑ひさうなはずだ。しかし。』

と聲を潜め、

『人を殺すほどの女と承知して、其の度胸に惚て女房になつて下れと云ふからには奈何いふ理由だと理由を話すまでも無いだらう、鬼の女房に鬼人がなるなら、鬼人の夫に鬼がなる道理、豈夫に佛性の男ならお前さんのやうな女を、好き好むで貰ふ馬鹿もあるまいから、まあ〳〵そこらで好加減に察して貰はうか。』

『なる程能く解りました、私程の鬼蘇を折つて遣らうと有仰る程の貴方、左や右聞いたは私が野暮でございました、それさへ御承知の上となら、不肖ながら宜しくお願ひ申します。』

『いや早速承知して下れて有難い、實は今朝の一番で大坂まで行く約束になつて居るのだが、花嫁さんを貰つて見れば、貰ひ早々出られもすまい、電報でもつて斷

つて置いて、今日は寛り末を固めの祝言事でも爲ると爲やう。』

『なんだか極が惡うございますわ。ほゝ』

『フム、人を馬鹿にしてらあ、極の惡いといふ柄はモウ少々柄が違つてるよ。』

『がが、緣といふものは可笑なものですことね。何が奈何して緣の端になるか知れや爲ません。』

と、山川の顏を見て、嬉しさうに莞爾。

（十一）

かくて山川は唯ある料理亭に命じて、俳句の宗匠としては贅澤過る程の料理を取寄せ、其の夕暮より浮世を憚る身の上とて、媒人入らずの三々九度は、兩人對坐で始つて、愉快さうに式ばかりの結婚の盃が濟むと、後は今の先までの他人とも覺えず、山川がお君と呼べば、お君は貴郎と呼び、齟齬ひから急に夫婦らしく改まつて

差しつ差されつ、互に陶然と酩酊した頃は、夏の夜の早くも十時過となつた。

『どうだ、大分醉つて來たから、モウお床入と爲やうぢやないか。』

醉眼朦朧と山川が云へば、お君も、

『私もあんまり嬉しさに、ツイ頂き過してこんなになりました。ではお床を布べませう。』

と、クッキリと白い顏にホンノリと紅を彩つて、優しさうで手で撫でながら起ちかゝつた。

『イヤお前には未だ夜具の在處も知れないだらうから、私が案内して手傳つて遣らう……これか、これは此まゝにして置いて明日の事さ。』

『おやッ私何の氣も付かないで居ましたか、婆やは奈何致しましたらう？』

驚いた如き容子で尋ねると、山川は微笑しながら、

『婆やは夕方返して了つたのだ……なあに初中終私の洗濯なんか爲せて居る、

懇意な婆やだから、他所に出掛ける時には何時でも留守居に頼むのだ、今夜のやうな慶たい晩は、他人入らずの對坐に限ると思つて、氣を利かして返したのだ、サア〳〵心配せずとも安心してシッポリと休むと爲やう』

と、お君諸共八疊の一室に入つて、匆々床を布べて枕に就いた。

『ヲッと床杯を忘れちやッたが、床杯も我々には無用な事、それよりか面白い寢物語でも始めやう。』

云ふ山川の顏をお君は惚々と眺めて居つたが。

『ね、貴方、變な事聞くやうですが、貴方はヒョッと靜岡の生れぢやありませんか私ごうも辭の調子が靜岡の方のやうに思ひますが……』

山川はニヤ〳〵と笑ひながら、

『序に手の筋を見て貰はうか、して見るとお前も靜岡に居た事があると見えるな。』

『居た事所ぢやありません、私は靜岡の生れですわ。』

『え、ッ、眞個靜岡か、へえ妙な事もあるもんだ、靜岡は何所だ、何町だ？』

『草深町ですわ。』

『草深町だ、眞個か。』

『何んの嘘言なんか云ひませう』

『ふむ、妙な事もあるものだ、シテお前の家の姓は何と云ふのだ。』

『笹野！』

『え、ッ、笹野？ではお父さんの名は俊行ぢやないか。』

『それを貴方奈何して御存じ？』

『ではお前笹野俊行の娘に違ひないのか。』

『はあ、眞個笹野の娘の君に違ひないんです。』

『しかし笹野の娘に君と云ふのは無い理だが、名を換へでもしたのか。』

『はあ、本當の名は住江と云ふのですが、こんな身分に墮落したものですから、自

分で出鱈目に君と換へました。

『だが貴方は奈何して私の父を御存知なんです？』

と、不審さうに問ひかけた。

（十二）

山川はトロリとした眼を睜り、

『えゝッ、ではお前があの住江さんか……ムフ奇態な事もあるもんだな、能々緣があつたのだね。』

と、今更の如くお君の顏をジッと眺める。

『アラ可厭ですよ、理由も聞かさずに那樣に御覽なすつて！どうしたと有仰るんです、早く理由を聞かして下さいな。』

お君の辭は耳に入らぬ如く、

『アム到頭遣ぢに墮落しッちやッたんだね。』

太く感じ入つた樣子である、

『アラ貴方、何を云つて被在るの、今更のやうに。』

『今更のやうぢやない、實に不思議なこともあるもんだ、まあ話して聞かすから聞くが可い。

今から丁度五年以前の夏の初、さうさ丁度今頃時分でもあつたらうか、さう〳〵シト〳〵と雨が降つて居たから確に今時分だ、私が東京から京都に來る路すがら友人の紹介で靜岡の俳句の宗匠を訪ねた所が、能く訪ねて下れた、先づ當分は寛りと遊んで居れ、其中には君のために俳筵を開くなんと、非常に手篤い待遇を試けて、急がぬ旅路ではある、云はるゝまゝに遊んで居ると、四五日經つてから私のために俳筵が開かれて、凡そ十五六人の俳句仲間が寄り集まつた、其の中で年の頃なら五十四五かとも思はるゝ品の宜い老人が、ッイ私の隣に坐つて居たが、

私が東京と云ふので頻と私と東京の樣子を尋ねたり、女學校などの事を尋ねたりして、其日は其なりに別れたが、翌日私を呼びに寄越して、是非遊びにと招待されたから、招かるゝまゝに往つて見ると、それが即ちお前のお父さんの笹野俊行さんだ。』

『えゝッ。』

『マア〳〵静にお聞き、私は必然俳句の話でも出るのだらうと思つてると、種々の御馳走が出て、一杯飲みながら話さるゝには、實は私に住江と云ふ唯た一人の娘があつて、東京へ出て勉強が爲たいと、日日毎日のやうに促み立てるので、まだ十四の春を迎へたばかりだから、一人手放して出すのは不安心とは思ひましたがあれほど喧じく云ふ程だから、心配するほどの事もあるまいと、思ひ切つて去年の春東京に出しまして、なんでも東京でも餘程評判の宜いと云ふ、秀閨女學校と云ふに入りましたぢや、所が親の私から恁う申すも可笑な話ですが、年は全く、

今年十五になつたのでございますが、體が大きいので確に十七位に見える上に、容貌が少しばかり垢抜けて生れましたので、然う云ふ事が災禍の基になりましたものか、そこは判然致しませんが、此の春からと云ふもの、月に大抵二本や三本は必ず寄來した手紙が、凧の絲でも切つたやうに、フッツリと來なくなりましたゆゑ、親と云ふものは馬鹿なもので、若や病氣にでもなつたんぢやあるまいかと一方ならず心配致して手紙を出して尋ねて遣ると、これまで下宿して居た家には居ないと云ふので、手紙は附箋をされて返つて來る、これは妙だと這度は學校へ宛て出して見ると、學校からも退校して居ないと云ふ附箋をして返して來る、全然行端が分らないやうな有樣になりましたので、これは打棄置かれんと、早速私が上京致しました、と老年の辯で涙含むで話しかけられた。』

（十三）

山川は尙も辭を繼ぎ、

『あまり不思議相な話だから、私も思はず一膝乘出して聞いて居ると、お父さんは涙の目を拭ひながら、早速上京して先づこれまで泊つて居た下宿屋へ驅け付けて聞き合せて見ると、何でも神田の猿樂町の何とか云ふ下宿へ、故國の人が居るから其處へ轉ると云つて、十二月の末に出たと、慥う云ひまして其の越した先の名前も解らんと云ふ始末。そこで今度は閨秀女學校に往つて聞合せて見ると、なる程十二月までは確に學校に入つて居たに相違ないが、春になつてからは一日も學校へ出ないと云ふお話し、いよ〳〵探ねる手蔓が無くなつたから、止を得ず警察へ搜索願を出して色々と調べて貰つたけれど、何處に何う隱れたものだか、生きてるか、死んだのか、全然行衛が分らないので、到頭二週間ばかり搜し探した揚句の果が、泣きの涙で歸りましたが、今日が日まで手紙一本寄來さん所を見ると、もう現世に居ないものだと斷念めては居りますが、女房には先立たれる、唯た一

人の娘には棄てられる、老先短くなつて何の樂みもないから、近頃では慥うして風流三昧に日を送つて、なるたけ娘の事も忘れるやうにと思つて居りますが、親ほど馬鹿なものはございませんで、親を見棄てるやうな娘でも、生きて居るか、それども他人に殺されたではあるまいかと、雨につけ風につけ思ひ出さぬ日とてはございません、殊に東京の人と聞きますれば、何となく戀しくツて、ヒヨツと娘の行衛が分る便になりはせんかと、老人の愚痴ッぽく、先生も東京と聞きましたゆゑ、愚痴話が聞いて頂きたさに、態々御足勞を願つたと云ふ理由、若しや然う云ふ名の女が、身投げでも爲たと、云ふ噂をお聞きなすつた事でもありましたら遠慮なくお聞かせなすつて下さいましと、涙ながらの物語を聞いて、私も思はず貰泣して、種々と慰さめた上、其日はそれで別れたが、それが緣の端になつて、後には到頭厄介になつて、彼是二月ばかり逗留して、毎日茶を嚥むだり、酒を飲むだりしながら俳句を詠んで遊んで居たが、其時お父さんの言はれるには、不束

な娘でも無事に居て下れるなら、是非貴方にお願ひ申して僅かばかりの財産でも相續して頂けば、こんな喜ばしい事はありせまんが、何も彼も肝腎の娘が居りませんから致方がありませんと、大層氣に入られて我子のやうに可愛がられたが、是非この京都に來たいと思つて出掛たことだから、お父さんとは涙ながらに別れを告げて、彼是三ヶ月目に靜岡を立つて京都に來たが、斗らずも笹野の娘の住江さんに廻り合つて、それと知らずに夫婦になると云ふのは、まるで芝居か小說にでもありさうな、不思議な事ぢやあるまいか。』

聞けば聞くほど不思議な山川の物語に、お君は呼吸も吐かずに聞いて居つたが、

『本當に不思議な事もあるものですね、しかし今更云つても返りませんが、私は餘程不孝ものね。そんな話を聞かされると、いくら不孝者の私でも、親の事を思ひ出して　可厭な心地になつて來ますわ。』

（十四）

『しかしお前は其の閨秀女學校とやらを廢めて、其から後何處に奈何して、恁麼所へ流れて來たのだ！』

と、山川が問へば、

『奈何してッて、那樣事は可いぢやありませんか、何だか極が惡くて話されやしませんわ。』

と、お君はニッと笑む、

『極が惡い……お巫山戯でないよ、人馬鹿にして。』

『眞個ですわ、恁う見えてもまだ色事には初心な笹野の嬢さんですもの、ホ、、、』

『笑はせやがる、人所白くもない、常談は常談として全くお前のお父さんが上京された頃、お前は何處に居たのだ、詳しい事を話して聞かせな、豈夫人買の手で賣

られた理ぢやなかつたらうね。』

『常談ぢやありませんよ、人を此方が賣ればとて、人に賣られるやうな、那樣お君さんぢやハイ憚ながらありませんよ。』

『ハイハイ恐れ入りました、飛んだ事を申しあげました。』

『本當に貴方は見掛に依らないのよ、あゝ云へば恁う云ふと隨分お人が惡いのね。』

『でもまだお君さんほど修業が積みませんので、どうぞこれからお手柔かに御指南を願ひます。』

『存じませんよ、憎らしい、何となりと有仰いまし。』

『もう〳〵何にも云はないから、サア〳〵早く話して聞かして下れ。』

と、やゝ眞面目になれば、お君は嫣乎と笑ひながら、

『ではお話爲ますからお笑ひなすつちや可厭ですよ。』

『何んで笑ふものか。』

『實は情夫が出來て、日光の邊を遊んで居たのです。』

『十五の春に！』

山川は呆れ顏に目を睜る。

『はあ。』

と、お君は平氣。

『隨分早かつたね、成程十五でも十七八に見えるッてお父さんの話が本當だつたと見える。』

『眞個よ、眞個十三四の時から十六かの十七かの云はれたんですもの、年齡は十五だつても無理はないぢやありませんか。』

山川は、それには何とも云はず、唯ニヤッと笑つて、

『シテ、其の情夫と云ふのは何うしたのだ。』

『それがさ貴方大變者でしてね、私が這麽莫迦女になつたのも、原の始りは其男の

ためですわ。』

『フム、一体何者だつたんだ。』

『何者ッて、大學生なんです。』

『フム〳〵。』

『私はまだ東京に出たばかりで都會馴れない所へ、其人が大層優しくして下れたもんですから、スッカリ欺されちやッたんです。』

『奈何して懇意くなッたんだ。』

『それがね、可笑な事からなんですよ、私上野を知らないもんですから、ある日曜日に往つて見やうと思つて出掛けたんです、上野には往きましたが、不案内で樣子が知れないもんですから、丁度櫻ケ岡の所に大學の制帽を冠つた書生が立つてたから、博物館を尋ねたのです、すると其學生の云ふには私も往くから案内してやらうッて、それから博物館に一緒に入りましたの。』

（十五）

『ハあゝ、すると其の大學生が些と色の小白い女惚のする顏で、加之に非常に優しくして下れたと云ふので、お前がポッと打込むだと云ふ寸法だね。』

『本當に貴方は氣が早いことね。』

『だつてそれに違ひはないんだらう。』

云つて、山川がお君の顏を見れば、お君はニコ〳〵笑ひつゝ、

『マア〳〵それならそれと爲て置きなさい、所でそれが緣の端になつて、到頭妙な關係になつちやッたんです、何うせ先方は然うでも無かつたでせうが、此方は初生の水の出端ですから、先方の云ふがまゝになつて、學校も何も其方退けで、唯モウ傍に寄合つて顏を眺めるが何より嬉しく、先方も私の下宿に來れば、私も先方へ押かける、揚句の果は父を僞つて金子を送らして、兩人手に手を取つて日光

見物に出かけると云ふ逆せやうなんでせう、すると日光の宿屋でもつて是非私に夫婦にならうッて云ふのでせう、私も無宙に惚てる端だから後先見すに承知して了ひましたの、然うすると約束を變へないと云ふ證據に、誓紙を爲やうと云つてモウ、今では何と書たか覺えもありませんが、夫婦になると云ふ事を書いて、互ひに血判まで爲たのです、それから東京に歸つて來て、兩人でもつて小さな家を借りて新世帶を持つたまでは、嬉しくて嬉しくて面白かつたけれど、ある日の事兩人で夕飯を食べてると、突然巡査や探偵が飛び込むで、『御用、御用』と取卷いて、兩人共高手小手に縛られて了つたんです、それから警察へ連られて、警部の辭で聞くと、私が大學生と思つたのは、有名の箱乘で本名を安達丑之助、箱乘社會では電の丑と云つて、前科四犯と云ふ曲者なんです、この時ばかりは私のやうなものでも、眞個膽が潰れましたの、でも私は固より惡事を一緒にしたと云ふのではなし、唯欺されて一緒に居たと云ふばかりですから、翌日になつて歸されま

したが、戀男は到頭一ヶ年の處分を受けて、巣鴨の監獄へ廻されて服役する身の上になつたでせう、そこで私は故國の父に詫をして直に歸らうと思つたのですがその時は貴方情けない事には、モウ懷姙して三月なんですもの、故國に歸る理には行かず、金子は無くなつて、持つてた指環を賣る、時計を賣る、金目になる衣物はスッカリ賣拂ふ、それでもやりきれなくなつて、到頭桂庵の手にかゝつて田舍の料理店に酌女、かれこれする中にお腹は漸々大きくなつて肩息をする苦しさ主人に理由を云つて賴むでも、そんな體で奉公に來るのが第一人を踏付てるだ、慳貪に怒り散らして聞いては呉れず、泣くに泣かれぬ苦しさに、惡い事とは知りながら主人の金子を、それも唯た六十圓、窃と盗むで家を飛び出し、名古屋まで高飛をして、彼處で身二つになつた處が、子供は二日ばかりすると失くなつたし入獄した戀男も獄死爲たと聞いたから、ヤレ〳〵これで一安心と思つた時は、身はモウ錆が任いて何時何處で拘引られるか知れない境涯、此末奈何したら宜から

うと、眞個二日ばかりと云ふものは考へ通しに考へ通しに考へましたよ。』

（十六）

お君が墮落の身の上話を、山川は我を忘れて聞いて居たが、此時漸く口を開いて、

『なる程飛んだ奴に爲てやられて、茲まで仕上げて來た理なんだね、それから奈何した？』

『いくら考へて見た處で、固より善い方へ智惠が廻らう筈はありません、ヱ、まゝよ、奈何せ這麼羽目に落ちて墮落したからにあ、毒を喰へば皿までとか、寧の事惡事の爲放題をして、私が男に欺されて這麼境涯に落たやうに、思ふ存分男を欺して此の敵を取つてやりませうと、先づ手始にさる田舍の國會議員を手球に取つて、首尾克く衣裳萬端身の廻を拵へさせた上、歲費を受取つてニコ〳〵歸つた其曉に、革鞄ぐるみ持出して一飛に安藝の廣島まで跡を晦まし、彼處等界隈の名所

古跡を見物して、それから流れ〳〵て神戸に來て、十七番館のオーソロシーと云ふ露西亞人の園女になつて、月々百圓宛の仕送を受けて、何不自由なく隱夫も拵へれば俳優遊びもする、小女の二人も使つて面白可笑暮して居たが、這度の戰爭に就て、其の露西亞人は商館を閉店つて歸つて了ふ、手切金に三百圓ばかり貰つたけれど、僅か二月ばかり經つか經たぬ間に浪費つて了つたし、何か宜い工夫はあるまいかと、思ふ矢先へ神戸から大阪まで行く滊車の中で、一言二言の言葉敵が馴染の因となつて、變な間になつたのが。』

と、俄に聲を潛め。

『昨夜の彼の鈍間なんですよ、茲まで無事で來るまでには、甚麼危ない及物の上を渡つた事か、自分ながらも思ひ出せば慄と仕ますわ、どうぞ可愛相なものだと同情してやつて下さいな。』

『しかし、恁う云ふ金箔附の姐さんを好き好むで夫婦になる物好も居るのだから、

うと、眞個二日ばかりと云ふものは考へ通しに考へ通しに考へましたよ。』

（十六）

お君が墮落の身の上話を、山川は我を忘れて聞いて居たが、此時漸く口を開いて、

『なる程飛んだ奴に爲てやられて、茲まで仕上げて來た理なんだね、それから奈何した？』

『いくら考へて見た處で、固より善い方へ智惠が廻らう筈はありません、ェ、まゝよ、奈何せ這麽羽目に落ちて墮落したからにあ、毒を喰へば皿までとか、寧の事惡事の爲放題をして、私が男に欺されて這麽境涯に落たやうに、思ふ存分男を欺して此の敵を取つてやりませうと、先づ手始にさる田舍の國會議員を手球に取つて、首尾克く衣裳萬端身の廻を拵へさせた上、歲費を受取つてニコ〳〵歸つた其曉に、革鞄ぐるみ持出して一飛に安藝の廣島まで跡を晦まし、彼處等界隈の名所

古跡を見物して、それから流れ〳〵て神戸に來て、十七番館のオーソロシーと云ふ露西亞人の圍女になつて、月々百圓宛の仕送を受けて、何不自由なく隱夫も拵へれば俳優遊びもする、小女の二人も使つて面白可笑暮して居たが、這度の戰爭に就て、其の露西亞人は商館を閉店つて歸つて了ふ、手切金に三百圓ばかり貰つたけれど、僅か二月ばかり經つか經たぬ間に浪費つて了つたし、何か宜い工夫はあるまいかと、思ふ矢先へ神戸から大阪まで行く滊車の中で、一言二言の言葉敵が馴染の因となつて、變な間になつたのが。』

と、俄に聲を潛め。

『昨夜の彼の鈍間なんですよ、茲まで無事で來るまでには、甚麽危ない及物の上を渡つた事か、自分ながらも思ひ出せば慄と仕ますわ、どうぞ可愛相なものだと同情してやつて下さいな。』

『しかし、恁う云ふ金箔附の姐さんを好き好むで夫婦になる物好も居るのだから、

世の中は種々さ、どうぞ親の許した夫と思つて、可厭ではあらうがお手柔に願ひます。』

『本當に不思議ですわね、これもお父さんの紹介かも知れない。モウ私もこれからは順しく爲ますから、一生見捨ないで下さいな。』

『とか何とか旨い文句を始め出したが、已に其手は葛根湯ほどにも利目がないよハ、、、。』

『あらまあ憎らしい、私だつて貴方を尋常の方と思ッちや居ませんわ、でなくて誰が私のやうな阿婆摺女を女房なんかになさるもんです。豈夫違やあ命を取られる位の事は覺悟して居ますよ、だけれども眞個私これまで隨分これならば生命まで打込むで見やうと思ふ程の男を探したけれど男振なら度胸なら貴方程の方は始てなんですもの、でなくて然う申すとお怒りなさるかも知れないけれど、假令惡事の秘密を握られて居るにした所で、誰が夫婦になるもんですか、眞個心底から

惚たからこそ恁ういふ事になつたんですから、どうぞ其の優しい心に免じて可愛がつて下さいな。』

『眞個お前が然ういふ心で居て下れるなら、なんで粗末にするものか、しかし私も今こそ這麼儚ない暮は爲て居るが、お前と云ふ對手が出來たからには、今に見ろ互に榮曜榮華な暮の出來る身分になつて見せるから……オヤもう一時だ、サアしッぽりと面白い夢でも見やうぢやないか。』

かくて新夫新婦は睡に就いたが、如何なる夢や結ぶであらう。

（十七）

御室雅致が非望に胸を燃やす中、山川宗匠が毒婦お君と日に愛情濃なる中、過ぎ逝く駒の足搔は早くも寒暖計の九十度を示す酷熱の頃とはなつた。

或日の夕間暮のことであつた、山川宗匠は南椽に棒縞の荒い浴衣着のまゝ席を搏へ

て、何方からともなく吹き送る涼風を浴びながら、夫婦膳を前に、早鮎の煮付に淡泊とした胡瓜揉を肴に、お君を前に侍らせて、晩酌を傾けつゝ、艶にして且つ粹なるお君の浴衣着の姿を眺め、

『お前には全く白絣は能く似るよ、然ふして端然と帶を太皷に結んだ容子は、奈何見ても中流以上の家庭に育つた令嬢としきあ思へない、成程姫樣お君と綽名を取つたも無理は無いわい。』

お君は手にした團扇で靜に風を送りつゝ。

『何を有仰るかと思へば私の棚卸しですか、お舍しなさいよ今更のやうに、それよりかサア一つお空けなさいましお酌を致しませう。』

『イヤ私よりかお前に一つ遣らう。』

盃を取り上げて、冷たのを呷と干してお君に献す。

『まあ、貴方モウ一つ飲むで然うして下さいな、へいお酌を……』

『あゝ溢れる、溢れる。』

と、口を盃に寄せて一口飲むで下に置き、

『時に月日の經つのは早いものぢやないか、お前が來てからモウ二ヶ月の餘になるね、しかし這麼閑靜な所で、貧乏世帶の内儀さんになつてるのは、嘸究屈で面白くないだらうね、能く辛抱爲てるね。』

『貴方にも似合ない、惚た人と暮すなら竹の柱の笘の屋根、眞個手鍋提げるか樂しみですわ、私ガヤ〳〵する街中はモウ心から飽々しましたから、此家に來てから氣が伸々したやうな思ひですわ、京に田舍ありと云ひますが、眞個此處は京都の中とは思へぬほど閑靜ですをとね。』

『能くもまあお前ほどの我任意女が辛抱してると思つて、全く感心してるよ。』

云つて盃を取上げて息に飲干して。

『モウ一つ注いで下れんか。』

と、盃を出す。お君は心得て燗を取上げたが余程冷たくなつて居るゆゑ、

『大層冷たくなりましたから、些とお待ちなさい、直に熱くして來ます。』

起たんとするを山川は手もて制め、

『熱い時だから、結句冷たのも宜いだらう、其まゝて置くが可い。』

此時表口で一聲高く、

『郵便！』

と訪ふ聲か聞えた、お君は小走に駈け出たが嬶て一通の封書を携へ來て山川に渡した。山川は手に取つて先づ表を眺むるに、宇治の御室雅敎から來たのである。手早く封を押披いて讀み下すのであつたが、偖如何なる事が記いてあるであらう？

（十八）

山川宗匠が讀み下した書面の文は

豫々好時機あれかしと祈居れ甲斐ありて、東京なる珍客病氣保養を兼ね、不日來京の旨通知越候に付御歡び被下度れ。

これに就き色々御相談申上度事も有之れ得ば、兩三日中に御來遊待入れ早々

七月十五日　　雅敎

孤舟殿

と、記してあつた、局外の者には要領を得ぬ書面であるが、山川には能く其の意味が解せられたものと見え、愉快さうな顏色で尙ほ繰返して眺めて居たが、忽ちバリ〳〵と寸斷して有合ふ煙草盆の吐月峯の中に投げ込むだ、そして莞爾と笑ひを見せて、

『大分面黑くなつて來たわい、サア前祝に一杯注いで下れ。』

と盃を出せば、お君は酌しながら、

『大層元氣が出たやうてすが、前祝つて何がお慶たい事があるんです。』

『ハ、、、まだこれまてはお前にも知らせずに秘して置たが、モウ恁うなりや何も彼も打明けて、お前に是非とも片相手を爲て貰はんけれやならない。』

『何を始めなさるんです。』

『何をッて今の書面の一件よ。』

『あら、今の書面の一件だつて、何が書てあつたか私見やしないぢやありませんか、一体何處から來たんです？』

『ハ、、こいつあ有理だ、見ない書面の解る理はない、あの書面か、あれはね宇治の御室と云ふ人から來たんだ。』

『御室つて何爲る人なの！』

『この御室と云ふのは、彼の有名な華族の御室侯爵の御子息なんだ。』

『へえ、御室侯爵の若樣なんかゞ、奈何して宇治のやうな所に來て被在るの!?』

『サ、其處だ、お前でも不思議に思ふだらう、誰だつて不思議に思はんものはな

い、所がこれに就いて種々入組むだ事情があるんだ、なか〳〵ッイ一朝一夕に話す理には行かんから、これはいづれ近日又寛り話して聞かさうが、一口に摘んで云へば、此の雅敎と云ふ方は妾腹の弟で、當時御室家の主人と云ふは正腹の兄なんだ、そこで兄なり正腹に當る母なりが沒義道な待遇をして、早く云へば宇治へ僅かばかりの財産を與つて追出して了つたんだ、それをだ、それを這度私が黑幕に入つて、一つ大芝居を打つて宇治に居る雅敎を世に出さうと云ふのだ、それに就いては奈何しても女形の腕利役者がなくつては芝居が脚色めないから、是非お前に其腕利役者に廻つて貰はなきあならないんだ、今來た手紙と云ふのも此事なんだ、這度その兄の侯爵が京都に遊びに來るんださうな、そこで先づ其れを序幕にポッ〳〵芝居を始めやうと云ふのだが、其の芝居に就ては略荒筋だけは考へてあるから、二三日中に宇治に行つて倘能く相談した上で、お前とも相談する事に爲やう、這奴を旨く仕遂たら表面は華族の家令、其實は侯爵家の總顧問、四五百

萬の財産を我任意自山に爲れやうと云ふ寸法さ、前祝と云ふのは茲の事さ、どうかお前も確り行つて下れ賴むよ。』

『隨分大きな芝居を脚案みなすつたのね、私のやうな未熟な腕で那樣大役が勤まるが奈何かは知らないけれど、然ういふ大役が性質好きだから、貴方を便りに腕に撚をかけて勤めて見ませう、若か失策つた所で此の生命を棄てると覺悟してりや間違ひはないでせう。』

と、嫣然と山川の顏を見た。

（十九）

『どうも御無沙汰致しました、大層な暑になりましたがお變りもなくて御慶たう存じます。』

と、叮嚀に叩頭を爲たは山川孤舟である。

『大層久し振だつたね、何時會つてから會はないかしら。』

云ふは御室雅敎である。

『左樣でございます、確かあの五月の雨の日にお目通り致したきりかと心得ます。』

『するとモウ二ヶ月以上になるね。』

『御意にございます。』

『ウム然う〳〵々あれから會はない、會はない、會つたら言つて遣らうと思ふて居つたが、あの晩到頭滊車に乘後れて步行で歸つたと云ふぢやないか、だから一泊して朝に爲ろと云つたのだ、道が糠つて困つたぢやらう。』

『いやどうも彼の晩ばかりは眞箇往生致しました、宜い心地に醉が廻りましたので、跚々と謠かなんか唸りながら停車場に往きますと、モウ半町と云ふ所でピューと笛を鳴らして發車する所なんでございます、吃驚して駈け出しましたが、自分で可笑なつて滊車を追掛けるのは前代未聞の圖だと、獨で笑ひました、途方に暮

れまして、引返して御厄介にならうかとも存じましたが、あんまり意氣地の無い話ですから、幸ひ雨も止むで居りましたゆゑ、寧そヲク〳〵歩行つて歸らうと覺悟致しまして、繪にも描けない姿になりまして、尻を端折つて出掛けましたが、伏見まで歸りますと、又點々と降つて參りまして、道は全然で深田の如く宅へ歸りますと、東雲が白むのと一時でございました、イヤどうも那麽愚劣な事は生れて始めてございました、』

『ハ、、それは隨分酷い目に逢つたね、外はどうだ隨分暑いだらう、サア先づ羽織は脱いでは奈何だ、そして此の縁側に出ると少しは風があつて涼しいやうだ。』

『では失禮ですが御免を蒙りまして……』

云ひつゝ紺帷子の上に着た黑紹の羽織を脱いで、袖疊にして片隅に寄せ、腰なる扇子を取出して靜に風を呼ぶ。

雅敎は上布の上に白縮緬の扱帶を締め、小豆色の革蒲團の上に坐し、岐阜製の水團扇を使つて居る。

『時に手紙は届いたかね。』

雅敎が問へば、

『ハイ確に届きまして拜見致しました、それゆゑ暑中の御見舞旁伺ひましてございます、まだ何日頃とも確と分りませんでございますか。』

『イヤ大抵分つて居るのぢや、今月の二十五日に東京を出發て、京都に二十八日に着くと云ふ報知なんだ。』

『二十八日に……レヲお宿は何方でございます。』

『宿は何時でも東山の中村樓と極つてるから、今度も多分彼處だらうと思つて居る。』

（二十）

『中村樓でございますか、シテ御供の樣子は知れないでございませうね』

と、山川が雅敦の顏を伺へば、

『誰を連れて來るか、幾人來るかと云ふことは分らないが、しかしこれまでは大抵家扶だけ從いて來る例であるから、這度も大方家扶一人だらうと思つて居る。』

『なる程……シテ其家扶と云ふは老人でございますか。』

『イヤ、餘り老人でない、かうつと……確か三十六七だと思つてる！』

『如何でございます、定めて頑固な方でございませうね。』

『イヤ、家令の清川と云ふ爺はなか〳〵頑固な奴だが、家扶の大山は年が若いだけに總てが當世向で、なか〳〵愉快な男だ、だから旅行などする時には何時も大山を連れる事に極めて居るやうだ。』

『然うでございますか、それは大きに都分が宜しうございます。』

『ところが今日伺ひましたのは、御手紙の趣の大抵豫ての御相談であらうと察しま

してございますが、何か此機を利用して方策を回らす御名案でもお有りなさいますのでございますか、若し別に御思慮なすつた事がございませんならば、私に一つ思ひ付いた策略があるのでございますが、しかしこれを實行するに就きましても、是非貴方のお力を借りなければならないのでございます。

如何でございませう？、事を謀るには這麽好時機と云ふものは再びある事ぢやありませんから、先づ大芝居の序幕として幕を開けて見やうと存じます。』

『世事に就いては總て君に任せてあるのだから、君が此時機を逸さず實行するが宜いと思ふなら、君の思慮通りに行つて下れ、しかし吳々も言つて置くが、思慮た上にも思慮て、必ず事の露顯せんやう注意して下れないと、萬一の事があると互の破滅だからね。』

『宜しうございます、大事は小事より露はれ易きもの、注意の上にも注意を加へて、

屹度旨く計ります。

就きましては、先づ序幕を開けるに就きまして貴方にお願ひ申したいのは、侯爵が此方に御滞在中に、何とか旨くお話し下すつて、私の宅へお遊びにお出が願ひたいのでございますが、何如でございませう、お出が願へるでせうか。』

雅致はやゝ思慮た後、

『病氣保養に來ると云ふのだから、其の病狀に依つては少々難かしいかも知れんと思ふが、しかし然ほど大した病氣でもなからうと思ふから、幸ひ歌や俳諧は好きでもあるし、何とか巧く持かけて屹度連れ出す事に爲やう、が一体奈何する積りなんだ。』

『それは些とまだ甲上げかねますが、いづれ確と脚色が出來上りましたらお噺申上げます。』

『しかし、君の家で思ひ切つた慘劇を演ずるのぢやあるまいね。』

『豈夫、那麼大膽な事は何程私が大惡黨でも行れませんよ、これでもまだ生命は惜

うございますからね、ハ、、、、』

云ひ了つて、忙しげに扇子を動かすのであつた。

(二十一)

侯爵御室爲雅の邸宅は、東京赤坂丹後町の高燥の土地で、方一丁四面を區劃つた廣やかな邸内に、宏莊の日本式家屋と、それに隣つて四層の堂々たる西洋館とが建並んで、庭園の如き其昔は人工になつたものであらうが、今は全く天然の妙趣に化して、得も云はれぬ雅致を示して居る、左に右赤坂で御室の屋敷と云へば、車夫などは客と應對をする標準にする程である、

主人爲雅侯は今年二十五で、美男子と云ふほどでは無いが、爭はれぬ氣品は父君其まゝの遺傳にて、何處と指點はならないけれど、下樣の人々には見ることの出來ない、應揚迫らざる風采があつて、ために然ほど美しからぬ容貌までが、何となく美

しく見える。

唯さへ蒲柳の身が、この春以來初中終氣分が優れぬので、某醫學博士を招いて診察させられた所が、運動不足から發した胃弱であると診斷して、なるたけ清新な空氣の流通する所で適度の運動さるゝやうにと勸告した。其後と云ふものは箱根の福住に出養生されて、只管攝生に注意された効あつて、四月の末はやゝ舊に復して御歸邸されたが、五月一日と云ふもの打續く五月雨に意の如き運動の能なかつた爲め、以前ほど激しくはないが、再び氣分に故障を生じたゆゑ、あらん限りの療養は加へてみたものゝ、奈何も渉々しい効驗がないので、醫士の勸めもあり旁々避暑を兼て京都に赴く事とはなつた。

愈よ明朝の急行列車で出發と云ふので、奥向は大分混雜して居る樣子である。それは行李の準備などもあるであらうが、一つは親戚や友人などが暫時の別を惜むために訪れたからである。

主人は西洋館の客室で、八九名の紳士を對手に、盛んに笑ひ興じつゝ談話中であつて、其聲は時々室外へ漏るゝのである、厨室の方では女中やコックが頻に働きながら、喋々と囀つて居る。

『ね、お瀧さん、這度御前のお供は誰方だい、清川さん？、大山さん？、松崎さん？。』

白布の胸前垂をかけたコックが、忙しさうに料理しながら問へば、お瀧は西洋皿を拭きながら

『豈夫清川さんぢやありますまいから、大山さんでせうと思ふの！』

『また大山さんかね、這度は此春と違つて所が我だから宜い保養が出來るね。大山さん一人だらうか、それともまだ誰かお連れになるか知らん。』

『詳しい事は聞かないけれど、大方大山さんお一人なんでせう。』

『菊野さんは氣が揉めるだらうね。御氣の毒見たやうだ。』

『あらお前さん、菊野さんが奈何かしたの？』

『奈何かしたのッて、大山さんのやうな好男子を京都に遣つて御覽、甚麽騒ぎが始まるか知れたもんぢやない。』

お瀧は怪訝な顏をして、

『オヤ、すると菊野さんと大山さんと事情でもあるの？』

『お前さんまだ知らないの？事情があるかないかは知らないが、大抵菊野さんの樣子を見りや知れさうなもんぢやないか。』

『だつて不義は御家の御法度ですもの、豈夫那樣事ないでせうよ。』

かゞる混雜の眞最中に、奥庭の四阿の中で密々語らう男女がある、これは何人であらう？

（二十二）

『ね、大山、またお前が供して行くやうに爲たさうなね、這度こそは嚴格の清川を從けて遣つて、後で思ふ存分に遊ぶ量見で居たのが、スッカリと的が外れて本當にガッカリして了つた。あれほど詳く言つて置いたのに、奈何して清川を遣るやうに爲なかつたんだい、矢張お前私が可厭だから自分でお供するやうに願つたんだらう、眞個お前のやうな薄情男はありやしないよ。』

四邊に氣を配りつゝ、四阿に腰をかけて密に恁う云つたは、誰あらう先殿の未亡人三輪子の方にて、良人侯爵の逝去と共に貞女らしく、髪こそ斬りたれ、まだ四十六の姥櫻、殘んの色香はデップリと肥太りたる皮膚の色澤にも現はれて、閨房淋しげな風情を示して居る。大山豐春は當惑相な顏色で、

『貴方のやうに有仰ると、私が好むでお供を願つたやうに聞えますが、私は貴方か

ら仰つた言葉を樂に、此度は是非清川さんをお召連下さるやうにと、再三御辭退致しましたが、清川は留守中の取締を爲せんければならないから、是非貴樣でなきやならないと有仰るものですから、止むを得ずお受け申した次第で、決して私から好むでお供する理由ぢやございません、それを貴方を可厭でお供をするのだとか、薄情男だとか云はれますのは誠に心外千萬な譯でございます。』

『だつて少しは私の心にもなつて見て下れるが可い、人目の關が多くて思ふやうに會つて話も出來ないから、爲雅と清川さへ出してやれば、後はお前が清川の代役を兼るのだから、何一つ爲るのでも私と相談爲なきやならないだらう、然うなると假令お前が私の居室へ來て居やうと、何彼の相談に來てると思つて、甚麼事を爲やうと怪しむ者はありやしない、それを何よりの樂みにして居たのが、スツカリと的が外れたんだもの、愚痴も出やうぢやないか。

しかしモウ明日立つ今夜になつて、何程お前に云つた所で爲方がないから、歸つて來るのを指を計へて待つてるゆゑ、爲雅の病氣が少しでも快くなつたら、一日も早く歸つて來て下れ。

そして、呉々も云つて置くが、京都は美人の本場だから、何程でも美しい女が居るけれど、必ず女などに口を利いてはなりませんよ、若も浮氣なんぞを爲た事が後で知れやうもんなら、其まゝには爲て置かないから然う思つてお居で！』

『奈何致しまして、御前の御供に參りながら女なんぞに……少しでも御快方にお向き遊ばさると、一日も早く歸京致しますゆゑ、御安心下さい。』

『口でばかり頑固さうにお云ひでも、この可愛らしい樣子を爲てるんだもの、甚麼事爲出かすか知れたもんぢやない、本當にお前は憎らしいよ。』

『ヲ、痛！、酷い事なさいますね。』

後は暫く辭は絶今て、西洋館に起る笑聲のみ幽に聲ゆるのであつた。

先刻の程から兩人の話を、石籠燈の蔭に身を潛めて耳を傾むけて居た人があるが、

話が消えたので忍足に四阿の中を透し見て、驚いた如く本宅の方へ立去つた。

（二十三）

御室侯爵は家扶の大山豐春を連れて、豫定の如く靜岡と名古屋に一兩日を遊び、七月の下旬に西京なる東山の中村樓へ着された。

日本は世界の大公園で、京都は日本の大公園である、殊にこの東山は京都の勝景中での絶景で、嵐山と並び稱せられて歌に詩に、名ある畫伯の筆に寫さるゝことも屢々あるのである。

中村樓は此の名山を我物顏に、四季折々の風情を坐らに眺望すべく營へられて、就中避暑などには有得べからざる旅館である。

御室侯爵は、着京された翌日から三年振の風光を愛でばやと、朝未明から大山を供に、今日も今日もと所々の勝景を探られ、殆んど五日ばかりと云ふもの、朝出て黃

昏頃に歸館するが例であつた。

其の故でもあるまいが、病氣は殆んど忘れた如く、服藥も時としては忘却さるゝ程で、侯爵は固より大山も太く打喜ぶのであつた。

今日も例の如く誰乎彼時にガラ〳〵と俥の音勇ましく歸つて見らるゝと、宇治なる御舍弟雅敎が遊びに來て、其歸りを待受けて居つたので、見るより機嫌克く、

『能く來たね、あの翌日來るかと思つて待つて居たが、正午頃まで待つても來ないもんだから、久し振で方々が見物したいので、到頭正午から大山を連れて出掛けて了つた、歸つて聞くと來なかつたと云ふから奈何したか知らと思つてたよ、どうだなか〳〵暑いぢやないか。』

『はい、彼の翌日お訪ね致さうと思つて準備をして居る所へ俳句の宗匠が來たもんですから、それに腰を折られて到頭失禮しました、如何です御容子は大層御勢が宜いやうぢやありませんか。』

『うむ、矢張運動せんけりや不可ないよ、東京を出てからまだ漸く一週間ばかりだが、病氣を忘れたほど快くなつた、この樣子なら、一二ヶ月も滯在爲やうものなら、必然全快するだらうと思つて、今日も大山と話して笑つた事だ。』

『お前近頃俳句を始めたのか。』

『はい、一昨年頃から始めました。』

『どうだ少しは面白い句が詠めるやうになつたか。』

『十句詠むで、七句位までは撰ける句があります。』

『ふむ、そりやなか〳〵巧いね、だが碌な宗匠でないのだらう、だから那樣に撰けるんぢやないか。』

『常談ぢやありません、宗匠は山山孤舟と云つてこの京都ぢやなか〳〵有名なものです。』

『すると京都から宗匠が出掛けるのか……では何日一日其の宗匠を招んで俳筵を

開いて見るかね。』

『では兄上も俳句をお詠みになるのですか。』

『お詠みになるのですかとは失敬な、玉虫と云ふ俳句の雜誌には、毎號予の句が載つてるから見るが可い、予ばかりぢやない大山も下手な宗匠位な句は詠むぞ。』

『へえ、大山もですか、では恁う致しませう宗匠の宅は南禪寺の側ですが、實に畫に描いたやうな景色の好い所ですから、私が通知して準備を爲せて置きますから散歩ながら出掛ける事に爲ませう、眞個四條派の山水にでも有りさうな宅ですよ。』

『然うか、それぢやお前から日を極めて報知て置くが可い。』

(二十四)

『宗匠モウ寢むだのか、些と起きて下れんか。』

と、山川孤舟の宅を訪ふものがある、まだ午後九時と云ふ時刻で、市中は雜踏の眞最中であるが、此の邊は京の田舍であるのに、搗て加へて俳句の宗匠の、客のある時は格別、客のない時は早くから寢むが例で、今宵も今の先床に就いた所である。

山川は聞耳を立てゝ、寸時返辭に躊躇して居ると、再び

『山川モウ寢むだのか、眼が覺めてるなら些と開けて下れんか。』

何となく聞き覺のある聲のやうにも思はるゝが、何に致せ、お君と云ふ犯罪者を隱匿ふ身の、若しやを慮りて、容易には答へぬ、やゝ寸時して、徐々表口まで出て、

『誰方です？』

と、漸く反問すれば、

『ヲ、まだ眼が覺めてたのか、私だ、私だ、些と開けて下れ！』

云ふ聲で始て其人が分つた如く、

『誰方かと思ひました、只今開けます。』

云ひつゝ表戸の錠を外してゴロ〳〵と戸を開けた。

『折角寢て居た所を氣の毒だつたね、是非話して置きたい事があるので、こんなに遲くやつて來たのだ。』

『いや、まだ早いのでございます、今九時を打つたばかりですが、私の方の寢みやうが早いものですから……實は眼に覺めて居りましたが、誰方かと云ふ事がどうも判然爲ないものですから、ツイ失禮を致しました、豈夫這麼時刻に貴方がお出でにならうなんとは夢にも思つて居ないものですから……サア取亂して居りますがどうぞお通り下さい。』

『では、此處でも話されんから些と御邪魔爲やうか。』

と、山川が案內に奧の一室に通つた、個は別人ならず御室雅敎である。

『只今煙草盆を……』

『イヤ急いで居るから煙草盆も何も要らない、只必要な話だけ爲て置けば宜いの

た。』

『では失禮致します。』

と、洋燈を横に對坐すれば、雅敎は聲を潜めて、

『誰も外に人は居ないだらうね、』

『ハイ、相變らず獨身者ですから御安心下さい。』

何故かお君の事は云はなかつた。

『いや、餘の事ぢやないが例の一件が至極好都合になつたぢや。』

『例の事と有仰るは？』

『兄上を此家に連れて來る一件さ。』

『なる程、へえ、へえ。』

『實は何の氣も付かず俳句の話を爲た所が、兄も矢張熱心な俳句黨で、那樣宗匠があるなら一日俳筵を開かうと言ひ出したから、こりや好い都合だと、それでは宗匠の宅は斯々な所で、非常に閑靜な景色に富むだ宅だから、散歩ながら出掛る、事に爲やう、宗匠には私から日を極めて通知を爲るからと云つた所が、大層喜んでそれでは奈何か然う云ふ都合に爲て下れいと云ふのだ、そこで何日が都合が宜いか、君へ相談したいと思つて、それで遣麽深更に來た理だ、君の方の都合は何日が宜いのか。』

『私の方の都合は何日でも宜しうございます、明日でも明後日でも……』

（二十五）

雅敎は些と思慮て、

『では恁う致さう、多少君の準備もあらうから明後日の午後からと云ふ事に……。』

『左樣、明日よりか矢張明後日の方が何角に就いて都合が宜しうございます、では明後日の午後と極めて頂きませう。』

『シテ奈何云ふ事を爲る積だ。』

『それは私に工夫がありますが、豈夫侯爵一人ぢやございますまい、例の大山とか云ふ家扶も御一緒でせうね。』

『うむ、そりや無論一緒だ、大山も俳句をやると云つて居たから。』

山川は寸時思案した後、

『實は其の家扶に困るのですが……若もです、若も非常に家扶が居て都合の悪い塲合には、其時貴方の御力を借ると云ふ事に極めて置きませう、大抵は奈何にか都合能く行れる積で居りますが……。』

『なあに、大山が居て邪魔になるやうな時は、些と目付で知らせて下れりや、奈何にか宜い方法を運らすよ。』

『何に致しましても、此方へ來てさへ貰やあモウ序幕は開くのですから、萬事は幕を開けた上で臨機應變にやる事に極めませう。』

『しかし君の事だから拔目はあるまいけれど、序幕からボロを見せないやうに旨く賴むよ。』

『細工は流々、仕上を御覽なさい、豈夫尻尾の見えるやうな脚色は致しません。』

『それでは明後日の午後と極めて、萬事其の積に計らうから、君の方でも其積りにしてね……』

『よろしうございます、萬事準備を整へてお待ち申して居ります。』

『では失禮する、折角寢むで居た所を氣の毒だつたね。』

『どう致しまして、御茶一つも差上げませんで誠に失禮致しました、』

かくて雅敎は別を告げて歸つて去つた。

山川は元の如く戸締をして、ランプを片手に寢床のある室に來て、

『お君、今のを見たか。』

『いゝえ見なかつたの！、あれが字治の御室さんですか。』

『うむ、然うよ。話の模様は大抵聞いたゞらうが、いよ〳〵お前に兩肌脱いで働らいて貰はなきやならない事になつたよ。』

『聲が小いから何の話だか些とも分らなかつたが、奈何云ふ都合になりましたの？』

『奈何云ふ都合と云つて、東京の御室侯爵が明後日の正午から此家に遊びに來る事になつたのだ、だから此間お前に云つて置た寸法に、旨く行つて貰はねばならん。』

『そりやお前さんから免が出てやれと、お言ひなさる事だから、やらない事はないけれど、可厭だね。』

『お前ばかりぢやない、私だつて惚た女房に那樣事を爲せるのは可厭だけれど、これも互の利益だから目を閉つて辛抱するより外はない。お前の事だから如才はないけれど、どうか其處の所を旨く賴むよ。』

『やるからには、美事爲遂てお目に懸けますけれど、後で左や右有仰ると可厭ですよ。』

『馬鹿な、なんで那樣事を……大事の前の小事ぢやないか。』

吁々惡漢、毒婦等は如何なる奸策を廻らさんとするのであらう？

（二十六）

今日しも御室侯爵兄弟は家扶の大山豐春を召連れ、南禪寺畔の山川宗匠の宅に、俳筵を催ふすべく赴いた。

豫て待設けたる事とて室内も淸らかに、庭園なども木の葉一ッ、塵一本も留めず、青々とした苔は水を含み、南風は戰々と樹の間を潜つて、何樣俳句などを詠むには相應しい家である。

御室侯爵は床柱を負ふて正座に、少し離れて弟雅敎は庭に對して家扶の大山豐春と先づ恁う云ふ順序に席が定つた。

兄爲雅は黒絽に藤巴の五ツ紋の單衣に、同じ羽織を着流し、浮模樣のある白繻珍の帶を締め、女にしても見たい程の細い首を白絽の袗に包むで、悠々迫らざるの態度を示して居る、弟雅敎は白絣の上布の單衣に、同じ紋所の五ツ紋の絽の羽織を着て、白絽の帶を纏ふて、兄の爲雅よりは軀幹も高く、却つて風采が見揚つて見える家扶の大山は千筋の糸織の單衣に絽の三ツ紋の羽織を着て、例は必ず袴着用であるが、今日は究屈御免と云ふので着流のまゝである。

山川は黒の帷子の上に三ツ紋の絽の羽織を着て、白つぽい仙臺平の袴を穿き、室の入口に恭しく坐つて兩手を支き、

『これは御前には初て尊顏を得まする、私は山川孤舟にございます、今日はかゝる荒屋もお厭ひなく能こそ御尊來下されまして誠に喜ばしう存じます、以後御見知置かれて宜しくお願ひ申します。』

爲雅も機嫌麗はしく、

『厄介だらうが俳句の指南が爲て貰ひたいと思つて、ハ、、』

『奈何仕つりまして、至つて未熟でございますから、御指南など、申す譯には參りませんが、及ばずながら御相手を仕りまするでございます。』

『イヤ然う謙遜されると困るぢや、宗匠の事は雅敎から聞いて知つて居る、奈何かは余り禮義正しく爲ないで、矢張宗匠の資格を以つて、遠慮なく添刪して貰ひたい。』

『然う仰せられては誠に汗顏の至りでございます、が、其れではお辭に從ひまして失禮致すでございます。』

それより、雅敎、大山へも挨拶を述べ了ると、お君は水も滴らんばかり美はしく化粧を凝らし、解いたらば地をも撫ずべき房々した髮を文金島田に結び、透綾の單服に鳩羽色繻珍の單帶を太皷に締め、雪なす白足袋に小さき足を包み、塵、觸も淑に、塗物の盆の上へ折紙正しく載せた菓子を、一人分づゝ恭々しく捧げて其前に進

め、其度毎に行儀正しく禮をなし、やがては宇治の玉露を寂びたる京燒の器に容れて、これも塗物の臺に載せて、一人づゝ作法正しく進めた後、次の室に退つて、恭しく一禮して、其まゝ彼方の室に退り去つた。

其の嬌羞を含むだ姿を、先刻の程から目も離さず、恍惚として眺めて居るは、爲雅侯であつた、イヤ爲雅侯ばかりではない、宇治の雅敎も、家扶の大山も均しく視線を奪はれた、しかし爲雅侯の恍惚となつたほ大に意味ありげであつたが、大山は全くお君の美しくてしかも良家の令孃たる態度を見て、其の何者なるかを識別せんがためで、又雅敎は山川は獨身でかゝる美人の居るべき理はない、奈何して何所から連れ來つたかと、それを想像せんがため注目を拂つたのである。

（二十七）

山川宗匠は豫て用意の料紙硯箱など取出し、勸めに任せて句題を撰めば、やがて一同暫し俳想に耽つて、只時々墨を磨す音の聞ゆるのみ、咳聲一つ出さなかつた。

かくて一同吟詠を認め了れば、山川は一々目を通して就中秀逸の句を撰み、それが了れば此度は運座を初めて、各自得意の句に俳腸を吐き盡し、十分の感興を得て俳筵を閉ぢたのは、永き日も既に暮なんとする頃であつた。侯爵は滿足の色を堪えて山川に打向ひ、

『今日は實に愉快であつた、この二三ヶ月間に恐く今日ほど感興を覺えた事は始めてだ、しかし興に乘じて大層遲くまで邪魔をして嘸迷惑であつたらう。どうぢやこれから予と一緒に晩餐に行かうではないか。』

『はい、誠に有難ふは存じますが、今晩は至つて野肴ばかりではございますが、晩餐を差上げたいと心得まして、既に準備が整つて居りますゆゑ、どうぞ御寛り遊ばして枉ても御笑味下さいまするやう、只管お願ひ申します。』

『イヤ、邪魔した上に那樣饗應なんか受けては氣の毒ぢや、それより予と一緒に行

く事に爲やう。』

山川の引留むるは、何か計略のある事と見て取つた雅敎は、早くも辭を挾み、

『ね、兄上、宗匠が貴方に差上げやうと思つて、折角に準備した樣子ですから、嘸非常な御馳走があるでせう、どうぞ饗應を受けてやつて下さい。』

爲雅も還るやうな樣子は爲たものゝ、有体を自白すれば、先刻茶を運んだ女の美しさがつく〳〵と身に沁みて、ならう事なら談話も爲て見たく、假令談話がならぬまでも、せめて今一度顏なりと見て歸りたく思ふ矢先であつたゆゑ、

『どうも那樣馳走などさせては太だ氣の毒だが、折角用意まで爲て下れたのなら、遠慮なく馳走を受ける事に致さうかね。』

山川は最と滿足さうに、

『然う云ふお辭を頂きましては却つて迷惑致します、御覽の通り片僻な場處でございますから、到底御意に召すやうな品はございませんが、唯妹が手料理と云ふを

御承味下さいますれば、有難き仕合せでございます。』

爲雅は妹の手料理と聞いていよ〳〵悅に入り、

『妹の手料理とな、イヤそれは尙以つて忝けない、しからば無遠慮に頂戴する事に致さう。シテ妹と云はるゝは先刻の娘さんかね。』

『ハイ左樣にございます。』

『宗匠の眞個の妹さんかね。』

『眞個の妹でございます。』

『年齡は幾何だね。』

『十九かと心得ます。』

かゝる談話の中に、千段卷黑塗の置洋燈は八疊の一室に三ヶ所も點じられ、日中と打つて變つた程涼しき風さへ室に流れ度つて、一層淸新の氣を覺えた。

待間程なく饗應の膳部は山海の珍味を載せて所狹きまで列べられ、配膳が了るとお

君は匂ひ溢るゝ花の姿を、胡蝶の如く盤の間に踊らせ、遺憾なく、而して無禮の無いやう、周旋して、客に滿足を與へんと注意するのであつた。

献、一献、酒は醉を呼び、醉は興を呼び、やがては觀聲屋を搖かすまで興多き宴となつた。

（二十八）

宴は酣になつて觀聲こそ起り、笑聲こそ湧け、濁りたる藝妓などの興を助くるにはあらず、客は一粒撰りに撰りたる上流の紳士、席は旗亭、待合などの汚らはしき塲所にはあらで、風韻を友とする宗匠が棲居、妹お君が一點の紅を彩に、三絃なきも琴線は餘韻ある音樂に醉ひ、俗謠などの卑しき聲を聞かぬ代りに、俳句の批評など醉に乘じて各自の口を衝いて出で、爲雅は興極まつて果は得意の謠曲さへ唄ひ出した。

かゝる中にもお君は飽ぐまで令嬢らしき態度を亂さず、一同の哈々と笑ひ囁めて時のみ、少に笑ひを瓣の如き唇に見せ、心ありげに愛らしい目にて爲雅侯に絶す秋波を送つて居た、さらねだに其の色香に魅せられた爲雅は、此の心ありげな秋波に襲はれて、身の毛も彌立つばかりの嬉しさを感じ、吁々若し此の美人と唯二人なりせば、せめては優しき言の葉も聞き、我も又思のたけを語るべきに、浮世なれ此の人垣に隔てらるゝ悔しさなどゝ、他一倍の愉快に驅られつゝ、同じく情を語る如き目もて見遣りつゝあつた。

しかし、雅敎も大山も餘程酩酊したものと相見え、眼花落井水底眠的の態度を示し、唯彌が上にも盃を仰ぐのみ、爲雅とお君が間にかゞる樂しき秘密の交されつゝある事は、夢にも心注かなかつた。唯この秘密の消息如何にと、それとなく注意しつゝあるは山川孤舟で、放した矢の首尾克く闘星に中るらしき樣子に、心密に我事成れりと喜ぶのであつた。

有間すると爲雅侯は、ツト座を起つて醉歩危ふげに何れにか行かんとする樣子なるに、山川は早くも其と察して、お君に目配せし、

『御前は御用に被在るのであらう、御案内申せ。』

云はれてお君は、靜に起つて爲雅の傍に進み、

『御案内申上げます。』

と、先に立ちて廊下傳ひ案内して、室よりはやゝ隔たつた厠へ往つた。

そして手洗鉢の彼方に柄杓を手にして待受けて居ると、爲雅はやがて出て來て手を淨め、お君が差出す白布にて拭ひ了り、そを又お君に返しやる途端、お君が差出す其手をばジッと握つて莞爾と笑つた。

驚いて振り解かんと爲るかと思へば、然る氣色もなく爲雅の爲るがまゝに、恥しげな態を作りながら嫣然と笑つて其顏を眺めた。

爲雅は滿面に喜色を漲らし、

『お前の名は何と云ふか。』

『君子と申します。』

『君子？愛らしい名だね、どうだ私と一緒に東京に行かないか。』

『……』

『可厭か！』

お君は嫣に笑ひながら、

『行きたうは存じますけれど、兄が許して下れませんので……』

『兄が許さない……では兄へは私から許すやうに話を爲るが、兄が許したら一緒に行くか。』

『は……い。』

も態ど恥しさを粧つて幽に口の中で答へた。

『では必然兄に話して私の屋敷へ連れ歸るが、其時になつて可厭だなんと云つては

不可いよ。』

『……』

辭はなくて恥しさうに笑つたが、しかし其笑の中には、確に承諾の意を含むで居つた。

（二十九）

侯爵御室爲雅は、昨夜山川宗匠の宅にて酒宴に夜を深されたのと、來京以來少し運動の激しかつた疲が出たのであらう、今朝は例より起床を遲れた事三時間、大抵五時に起床するのが、九時少し前に起きられた。

そして僅に一椀の珈琲と、少量の牛乳を飲むだまゝ、何となく氣分が勝れぬとて朝餉は食べなかつた。

そして例は起きがけに、必ず庭園に出て園内に運動を試むるを、何よりの樂みに爲て居るのが、今日は然る樣子もなく、新聞すらも目だに觸れず、十疊の一室に孑然と脇息に凭りかゝつたまゝ、何を見るともなくジッと空を瞶めて、時々吐息を洩し何か思案に余る事でもあるかのやう、打つて變つた不機嫌である。

例なれば、大山、大山と、徒然の相手に召寄せられて、ヤレ俳句、ヤレ圍碁、ヤレ運動と、何がな對手欲しき侯爵の、今日に限つて大山居るかとも、大山の大の字も云はぬに、從者として附添ふ家扶の大山は、大方ならぬ心配して、若や昨夜の酒が病氣に障つたのではあるまいか、かゝる事より病の重る如き事でもあらば、附添ふ自分の役目が濟まぬ、などゝ種々に氣を揉むだ挙句、左も右御機嫌を伺はばやと、次の室まで行つて密と内の消息を伺へば、かゝる事とは露知らぬ侯爵は、

『奈何したもんだらう、若も這麼事言ひ出したら必然嚴ましく留立てするに相違ない、しかしそれは病氣保養のためだと云へば、承かない事もあるまいが、先方へは誰を賴むで遣れば宜いか知らん、雅致から云はせると誠に好都合だが、豈夫現

在の弟に云ふも異なものだし、實に困つたなア……ェ、まゝよ猶且弟から云はして見る事に爲やう、どうもそれが一番事が成功爲るやうに思はれる、然うだ然うだ。』

と、何事かは知れねど、獨語ちつゝ決心した樣子である。

次の室に呼吸を殺して聞いて居た大山は、昨夜の酒が病氣に障つた事と、一方ならず氣を痛めたけれど、今の述懷の樣子では酒の病氣を募らせたにはあらで、何か他に打明け難き思事あつての故と覺つたから、重荷一つ下した如く、ヤレ〳〵と胸を撫で下した、扨も主に仕ふる身も辛きものかな。

かくて大山は、何知らぬ樣子にて、恐る〳〵間の襖を推排き、次の室に兩手恭しく、

『何か御用はございませんか。』

侯爵は脳息に凭れたまゝ此方に向いて、

『イヤ、何も別に用事はないが、近う進むで寸時話さんか。』

『はい、有難ふ存じます。』

と、云はるゝまゝに室に入つて、余程隔つて坐を攝へ、

『今朝は御目覺が例より餘程遲くて被在いましたのに、御膳もお召しになりませず庭内の御運動も遊ばさないやうに御見受け申しましたゆゑ、若や昨夜の御酒が御躰に害したのではあるまいかと、大變心配致し居りまするが、如何に居らせれます、別に御氣分にお障はございませんでせうか。』

『イヤ病氣には別に障つたやうには思はんが、どうやら些と疲れが出たやうに思はれる。』

『しかし、恐れながら餘程お顏色が沈むで被在るやうにお見受け申しますが、若やお軀に御異狀などあつてはなりませんゆゑ、醫士を召びまして診察を命じましては如何でございます。』

すると侯爵は沈み勝の顏に微笑を泛べ、

『イヤ、いくら名醫を招んだ所が、此病ばかりは到底治療は出來ないから、まあ〳〵此まゝに仕て置くが可い。』

（三十）

黑つた侯爵の辭に、大山は怪訝な眼色で、

『何と仰せられます、名醫を招んでも到底治療が出來ないと仰せられますのはこの豐春には頗と了解致し難ふございます、何處か名醫にも治し難い病症でも現はれましてございますか。』

『ハ、、、貴樣にも困るなア然う通が利かなくては、醫學の進歩した今日名醫にも治療の出來ん病氣と云へば、大抵覺れさうなものだのに。』

主家の風儀を案して、人もあるべきに大殿の未亡人と密通する程の大山が、斯ばかりの事覺られぬ理はなく、扨はと思ひ當つた事のないではなけれど、尙も空惚けた調子で、

『然う仰せられますと、ます〳〵恐縮致しまするが、能く四百四病の外の病氣は耳に致した事もございますが、それは貧の病と申して下樣にこそあれ、上流社會にあるべき病ではございませず、其外には。』

と、寸時思案して、忽ち覺つたらしく勢ひよく丁と膝を拍ち。

『イヤ、これは恐れ入りました、通が利かぬと仰せらるゝも更々御無理はございません、漸く覺りましてございます、なる程。へえ、成程、名醫に治療の出來ん御病氣。イヤ御道理。へえ、なる程。』

侯爵は何時しか沈むで居た色さへ舊に復して、

『太く感心した樣子だが覺れたか。』

『ハイ、漸く覺りましてございます。』

『奈何覺つた、申して見よ。』

大山も些と笑ひを含み。

『申し上げますが、若も間違ました節は幾重にもお赦しを願ひます……私の覺りましたのは、下様の者が謠ひます俗謠でございます。』

『俗謠で覺つた。何と云ふ……。』

『能く下様の者が（御醫者様でも熱海の湯でも愈た病は治りやせぬ）と斯様な唄を謠ひまするが、今御前の仰せになりましたのも、恁う云ふ御病氣ではあるまいかと考へましてございます。』

云ひ了つて莞爾々々笑へば、侯爵も同じやうに笑ひながら、

『なか〳〵貴様は面白い唄を知つて居るなア。眞個其の唄のやうな病氣に罹つたので、それで今朝は御膳も進まねば、運動に出る勇氣もなくて、何だか恁う異な心地になつて不愉快で堪えられないのだ、この様子で見ると病氣の保養どころではない、却つて病氣を重くしに來たやうなものだ、實に困つた事になつたわい。』

云ひ了つて太息を吐いた。

（三十一）

家扶の大山は、侯爵の煩悶爲始めた其原因は確に其と察しは爲たものゝ、尙も素知らぬ躰に、

『誠に困つた事でございます。左様な事から致して御病氣が重るやうな事にでもなりますると、第一お供に參つた私が御屋敷へ申譯がございません、しかし假令申譯がないに致しました所で、御病氣には換へられませんが、一体奈何遊ばしたと有仰るのでございます、どうか明さまに打明けてお聞かせなすつて下さい。』

『貴様が然う眞面目で云ふと、何だか些と面目なくて言ひ難ぬる次第だが、マア左に右話すから宜からうやうに取斗らつて下れ。』

『そりやアもう、仰せらるゝまでもございません、私に取斗れますることなら、如何なる事でも御病氣には換へられませんゆゑ、必然取斗らひまするでございます。』

侯爵は有繋に言ひ難いかして些と躊躇つたが、又思ひ決つた如き樣子で、

『實はね、些と面目ない話だが、昨日遊びに往つた彼の宗匠の宅で、給仕に出て來た宗匠の妹だがね、奈何言ふものか一目見た時から、吁々愛らしい女も世には居るものだと、つく〳〵と身に泌みたのが戀の原因となつて、昨夜此宿に還つてからも、全く其姿が目に殘つて忘れられない、ぢやマア然う笑つて下れるな、眞個の事を話すのぢや、それから床に就いた所が、夢ともなく現ともなく彼の女が予の側に來て、何かと世話を爲て下れる、其の容子が淑で奈何見ても俳句の宗匠位の家で育つた女とは見えないのだ、同族の家にでも彼れ程の容貌と彼れ程の行儀正しい女は恐くあるまいと思はれた、其れやこれやで昨夜は夜一夜マンヂリとも

爲なかつたが、曉方になつてトロ〳〵と眠つたと思ふと、疲が出たと見えてグッスリ眠つて目が覺めたのは軈て九時にならうと云ふ時だつた。

ところが、床を離れると不思議な事には又彼の女の姿が目前にチラついて、奈何忘れやうと思つても忘れる事がならないのだ、奈何かして忘れやうと思へば、氣が重くなつて庭に出て運動爲て見る勇氣も出ないぢや、この樣子で見ると眞個彼の女のために一つ病氣が加はつたやうなもので、迚も容易には治るまいと思ふのだが、何か宜い工夫は無いであらうか。』

『どうも取んでもない御病氣が起りましてございますなア、成程仰せの通り、御同族中にも彼れだけの美人は、奈何探しました所であるものぢやございません、美人と云ふ評判になつて居りまする、土師伯爵の御令嬢でも、松平子爵の御令妹でも、迚も競べものにはならないでございます、御前の御意に召しましたも決して無理とは存じませんが、何を申すも對手は高が宗匠の妹、貴族中での名門たる

御室侯爵の御對手に致さるべき身分ではございません、さればと申して妾、側女には痩ても枯ても宗匠を爲る程の男ですから、到底應ずる理もございませず、殊に私がお供をして參りながら御病氣御保養中に、かゝる事があつたと申しましては、御屋敷へ對して申譯の辭もございませんゆゑ、お心は萬々お察し申上げますが、此事ばかりはどうぞ御斷念遊ばしますやう、平にお願ひ致します。』

（三十二）

侯爵は少しく不興顏に、

『そりや貴樣が斷念せよと云ふなら、致し方がないから斷念は致さうが、其代り予は其がために病氣を起して甚麽重病になるかも知れんが、假令甚麽重病になつても彼の女を斷念せよと云ふのか。』

『奈何仕りまして、決して左う云ふ理ではございませんが、何分にも餘りに身分が

違つて居りますゆゑ申上げたのでございますが、それがために重病など起されましては、尙以つてお屋敷へ申譯がございません。致しますると御前の思召は如何遊ばさうと仰るのでございます。』

『予は彼の女を側に置て、歸京の節は屋敷へ連れる所存だ。』

『恐れながら、それは御前のお辭ではございするが、彼の女は浮川竹に身を沈めて居る遊女などではございません、苟めにも京都では名を知られた宗匠の妹でございます、して見まするとと、假令奈何遊ばすに致しましても、奥方ならば奥方、お妾ならばお妾と、名を正して申込むで見ません事には、昔と違ひまして當今は金や權勢などは塵芥の如く見做して居る輩もございますから、先方で何とお答へ致すか、これも一つの疑問でございます、御前のお心では奈何云ふ身分でお連れなさらうと有仰るのでございます？』

『奈何云ふ身分と申して、妾で先方で承知して下れりや妾でもよし、妾などは可厭

だと云ふなら奥にでも、それは先方の望次第で宜しい。』

『イヤ、然う云ふ御思召でございますなら、能く解りましてございます。しからばこれから委細の事を認めまして、御屋敷の方から清川を召寄る事に致しませう、其上でございませんと、私が一存で取斗らひます譯に參りかねます、どうぞ此處四五日の御猶豫を願ひます。』

爲雅はやゝ周章の氣味で、

『何と申す？、屋敷へ申遣して清川を呼び寄せる。清川のやうな昔氣質なものを呼びよせてなるものか、それこそ冗らん格式だの系統だのと嚴格な事ばかり列べ立てゝ、成就すべき事も破壞して了ふ、屋敷へは何事も暫く知らせずに置いて、貴樣の一量見で計らつて置いて下れ。』

『ではござりまするが、他の事でございますれば如何やうにも取計らひまするが、何を申しましても御家に對する一大事でございますれば、こればかりは私の一量見に計らひまする事は幾重にも御免を蒙ります。』

爲雅は餘程當惑の樣子で、寸時何事か思案に沈むで居られたが、やゝあつて、

『なる程お前の云ふのも有理の事だ、すると妾と云ふ事なら何も御室家に瑾が付くと云ふではなし、父上だつて側にお置きになつた位だから、母上だつて清川だつて嚴しは云ふ理もないゆゑ、妾と云ふ事にしてお前の量見で取計つて下れんか、さもなければ全く予は彼の女のために病氣が起る。その代りお前が此事を首尾克く計つて下れるなら、予もお前の望む事を何でも承いて遣はす、予が一生の頼みだ、どうぞ宜いやうに計らつて下れ。』

只管頼むのであつた。

大山は此の戀を如何に處置するであらう？

（三十三）

爲雅の餘義なき賴みに、大山も頓にお答へもしなかつたが、心に期した事でもあるやう、

『御前が病氣におなり遊ばすまで御執心の女と仰せられまする上は、宜しうございます、假令お屋敷で故障が起りませうと、其罪は私の一身に被つてお取持致しませう。が、其代りにはどうぞ私の願もお聞容れ下さいまするやうにお願ひ申します。』

『すりやアノ貴樣の了見で取斗ると申すか、此戀を成就させて下れるなら、貴樣の望は何でも聞き入れて遣る、望みがあるなら何なりと申せ。』

『しからばお辭に甘へて申し上げます、私の願と申すは餘の義でもございません、どうぞ當時お屋敷へ上つて居りまする、清川の娘菊野を手前の妻にお下げ下されやうなら、其御禮と致しまして、御前のお望は必度成就させまするでございます。』

『清川の娘菊野を其方が妻に欲しいと申すか。』

『御意にござります。』

『よろしい予が身に引受げて必度媒酌を爲て遣はす安心致せ。』

『失禮な事をお願ひ申上げまして誠に恐れ入りました、面目もございませんが何分にも御前の御威光をもちまして……』

『よろしい、歸京次第取持つて遣はす。』

『早速の御承諾お禮の申上げやうもございません。有難う存じます。

致しますると宗匠の方のお話でございますが、妾奉公に差上げないかとも申かねまするゆゑ、初は唯何となく京都に御滯在中お側で御用を足すものがなくて御不自由だから、御滯在中貸して下れぬかと云ふやうな事に致してお呼び寄せになりましたら、宗匠の方でも否應なしに應ずるであらうと思ひます、然うして側に引寄せになつた上で、偖恁うだがと相談に及んだなら豈夫可厭とは申さんであらうと考へまするが、如何思召しまする？』

爲雅は只恐悦の体で、

『其邊は何方になつても其方の宜からうやうに計らつて下れ。』

『それはそれと致しまして宗匠へ話しまするは、私から突然申しまするも、何だか其處の所が可怪見えまするゆゑ、これは一番宇治の若様に願つて、若様の口から話して頂くやうに致しませう、若様と宗匠とは御懇意の間柄のやうにお見受け申しますから、これが何より捷路かと存じます。』

『なる程雅敎から云へば都合は宜いが、しかし彼にこんな事を聞かせるも些と面目ない話だし……』

『しかし、假令若様に話さないと致しましても、直に知れる事でございますから、それよりか斯様々々と御前には内々の積りで、私から御相談申した方が、何彼につけて宜からうかと存じます。』

『なるほど、それも然うだ、しかれば萬事雅敎と相談して宜からうやうに取計らつて下れ。』

『心得ましてございます、早速宇治へ書面を出しまして若様のお出でを願ふ事に致しませう。』

時しも宿の女中は、恐る〳〵次の間に手を支へ、

『宇治の若殿様がお越しでございます。』

（三十四）

宇治の若殿様がお越と云ふ女中の知らせに、家扶の大山は侯爵へ一禮して、其まゝ迎へに出たが、やゞて侯爵の室へは導かず、唯ある一室に案内して對坐した。

雅敎は穩かならん眼色で、

『一体如何お悪いのだ、何か宗匠の宅で召上つたものが害したとでも云ふのか。』

『いゝえ、然う云ふ理でもないのでございます。』

『醫士は何と診斷した？』

『ところが、醫士にはまだ診察させないのでございます。』

『醫士に診察させない。』

『伺さしてひございましたが、それには及ばないと仰せられますので。』

『假令それに及ばないと云はれても、那樣御容子だのに醫士に診察させんと云ふ事があるものか、早速電話を架けて招ぶが宜い。』

『それに就けて、實は若樣に是非御相談申さなければならない事がございますので、只今手紙を差上げやうと存じて居つた所でございます。ところへ折能くお越し下さいましたゆゑ、失禮ながら別室へお招き申した次第でございます。

なる程、御膳も召さず、新聞も御覽にならない程の御病氣に、醫士を招がないと云へば、然う驚きなさるも御有理でございますが、此の病氣は醫士を招く必要のない御病氣でございます。

と申したばかりでは御不審が晴れないでございませうが、此處が若樣へ御相談申さなければならない所でございます。』

雅敎は思はず眉を顰めて一膝乘り出した。

『大きな聲では申されませんが、戀病で被在れます。』

『えゝッ、戀病!!?』

有繋に驚いて目を睜つた。

『イヤ驚きなさるも御無理はございません、が、全く戀病で被在れます。』

『一体何處の何と云ふ女だ。』

『イヤ、只今お話し申上げます。其の御前が想を懸けられました女と云ひますは誰あらう昨日のそれ、山川宗匠のお妹でございます。アノ女が非常に御意に召したものと見えまして、昨夜などは其事ばかり思ひ續けになりまして、マンジリとも遊ばさらないと云ふ在樣で、今朝お目覺になりましたのは例より三時間も遲れ

まして、大屑御血色がお宜しくないものですから、御機嫌を伺ひますると、漸く口をお開きになつて仰せられたのが、只今申上げた次第でございます、それで私へ有仰には、是非彼の女を側に置きたいから、宗匠の宅へ参つて其事を申込めと仰せられまするけれど、奥方様には天で格が違ひまする、然うかと申して苟めにも宗匠の妹を妾にとは申難い話でございまするゆゑ、取んだ事になつたと、私一人が大心配致して居る所でございますどうか御家の汚れにならないやう、又御前のお望みも協ひますやうな、名案は無いものでございませうか、此義を御相談申したいと存じましたのでございます。』

『なる程、それやお前も嘸迷惑するだらうが、お前の心では何と考へる？』

と、先づ恁う問ひ返して、ジッと大山の顔を眺めた。

（三十五）

雅敎の問に大山は、暫し思案する如き様子を示した後、

『左様でございます、私は御病氣御保養のお供に参つてる身分でございまするゆゑ、御保養中に女などはお躰に障りますのみならず、お屋敷へ申譯の辭がございませんから、どうぞ御斷念下さいますやうにと、懇々お願ひ申しましたが、どうしても斷念する事はならない、强て斷念せよと云へば益々病氣が重くなるが、病氣は重くなつても斷念せよと勸めるかと、恁樣に仰せになるもんですから、御前の御病氣には換られませんから、それでは左に右一應宗匠へ話して見ませうと、お受けは致しましたものゝ、昨日始めて逢つたばかりの私でございますゆゑ、何と宗匠に話したものであらうか、豈夫妹御を妾にとは何が何でも言ひ難し、實は其辭に困りまして、これは何に致しても若樣は御懇意の御樣子であるから、若樣へ御相談申して宜い御智恵を拜借致して、其上の事に致さうと存じましたので、別に考へも何も無いのでございます、如何致したものでございませう、どうぞ宜

い分別を拜借致したいものでございます。』

『なる程、それほど御執心なら、今更御諫申した所で却つて病氣を重くするやうなものだ、致方がないから兄上の望み通りに彼の女をお側へ呼び寄せるより外はないだらう、先づそれはそれと極めた所で、山川への申込みだがね、彼の男は俳句の宗匠こそ爲て居るが、あれでも元は相應な幕臣の家に生れたもので、なか〳〵氣骨の稜々とした男だから、話の爲やうでは一も二もなく謝絶して了うかも分らない、余程呼吸を計つて話さなきやならないのだ、ところでお前はまだ懇意なと云ふ間でもないから、何彼につけて不都合な塢合もあるだらうゆゑ、何事も兄上のためと思つて、私が宗匠に會つて旨く話してやらう、私の口から申込めば大抵十中の八九までは成功する積りだから。』

『でうも有難う存じます、若樣に然う云ふ風に願はれまするとも、誠に何彼に就けて好都合でございます、甚だもつて恐縮の至りでございまするが、御前のため私を助けるためだと思召しまして、どうぞ一つ御盡力下されまするやう、偏にお願ひ申しまする。』

『ではこれから、直に山川の宅へ出懸くる事に致すから、どうか兄上へ宜しく申上げて下れ、いづれ吉左右を得て歸りがけにお目に懸る事に致さう。』

『御前へは私より宜しなに申上げまするでございます、左樣なれば恐縮ながら宜しくお願ひ申上げます。』

雅敎は、大山と別れて其まゝ山川の宅に出かけて往つた。

大山は又爲雅侯の室に到り。

『宇治の若樣に私の心として、お願ひ申しました所が早速御承諾下さいまして只今直に先方へお出懸下さいましてございます。』

爲雅は最と滿足の体で、

『ふむ、雅敎が參つたか、どうか巧く話して承諾させて下れりや宜いがね。』

『十中の八九までは成功さすと云つてお出になりましてございますゆゑ、大抵は大丈夫かと存じまする。』

『何にしても心配でならんわい。』

（三十六）

今しも山川が宅の奥座敷で、風を扇に招きながら密に語らひ居るは、御室雅敎と山川宗匠である。

雅敎は疑惑の眼を睜りながら、

『何より先に聞かなきやならないのは昨日の美人だが、彼女は全く君の妹かね。』

山川は微笑しながら、

『全く妹です、まだ此間故國から參つたばかりですから、御存じない理でございます。』

『どうも君は獨身の理で、那麼美しい妹なんかないと思つて居たのに、突然座敷に出て來たから、奈何した女であらうと不思議で堪らなかつた。』

『美しいなんと被仰られては面目次第もございません、どうせ私のやうなもの〳〵妹でございますから、へ、、、。』

『イヤ全く美人だ、あれ程の美人の本場の京にも恐くない。』

『どうも太く御賞に預りまして有難ふ存じます、へ、、、、。』

『時に侯爵は如何遊ばされました、實はお禮に伺候致さうかと存じて居つた戻でございます。』

『どうも非常の滿足で、病氣も何も治つたやうなと喜んで居たのだ、ところが今日宿に往つて見ると非常な病氣に罹つて、昨夜はマンジリとも爲なかつたさうだ。』

山川も驚きの眼を睜つて、

『非常な御病氣？、どうお惡いのでございます。』

『私が今君の宅に來たのも、其の病氣に就いて相談に來たのだ。』

山川は、作戰計畫の圖に的つたかと、心に喜びつゝ然あらぬ体で、

『侯爵の御病氣に就て私に御相談？、それは一体奈何云ふお話でございます。』

『奈何云ふ談話と云つて、到頭君の脚色だ筋書通り、首尾克く序幕が開きさうだわい。なる程君は芝居を作る事は巧いもんだ、私は昨夜は何の氣も付かなかつたが、今日になつて漸く君の狂言が解つた。

まあ聞いて下れ恁ういふ理さ。實は昨夜の催ふしが例の一件の序幕だと言ふ君の談話であつたに、私の目には少しも然う云ふ反響が見えなかつたのだ、あまりに無意味のやうに感じたから、今日は左に右君に會つて何か結果を奏したか聞いて見やうと思つて出かけたのだ、ところで先づ兄の宿を尋ねて、何か異狀はないか觀察してからに爲やうと、中村樓を訪ねて見たのぢや、すると豈斗らんや家扶の大山が出迎へて、私を別室に通して云ふには、兄が昨夜から病氣に罹つて夜一夜

寢も爲なかつたと云ふ談話、然う急に惡くなつたのは奈何云ふ理かと、段々容子を質して見ると、其の病氣と云ふのが、驚くぢやないか戀病と云ふのだ、何處の誰とは云ふまでもなく、聞くまでもなく君の妹さんだ、其處で私も始てハ、アこれが山川の所謂御家騷動の序幕だな、と氣が付いて君の手腕に感服したのだ。

ところで兄が妹さんを是非にと云ふので、實に私が其の談判委員に賴まれて來た理さ、奈何であらう、無論君の脚色も恁うなる積りであつたらうとは思ふが、妹さんを兄の希望通りにして遣つて下れないかね。』

と、山川の顏を見やつた。

（三十七）

山川は尙もニヤ〳〵と、扇の手を留めて、

『實は貴方のお察し通り、眞個く妹を玉に使つて試して見たのですが、此方の筋書

通りに陷つて來りや好都合でございます。そりやあどうせ此方から仕向けた策略ですから、希望とありやア差上げも致しますが、此方の希望も聞いて貰はなきやア、大事の働きが出來ませんから、其處は貴方が仲間に入つて巧く調子を取つて下さらんと困ります。』

『そりや云ふまでの事はない、出來るだけの働きは爲るが一体奈何云ふ希望があるんだ、私の考へでは病氣を起すほど熱心に焦れて居るのだから、無論大抵な希望は聞くでもあらうし、聞かせもする考へだか……』

『イヤ、希望と云つた所で、那樣大した希望ではございません、大事の目的を遂げるために、私が侯爵家に入り込まないと、いくら妹に言付けた所で年端の行かない女などに思ひ切つた仕事が出來るもんぢやございませんから、妹を差上げる條件と致して、私も侯爵家へ召抱へられる樣に御取斗らひが願ひたいのでございます、私が總て惡事の黑幕にならなきやア。些とでも覺られやうものなら、これまでの苦心が悉く水泡になるのみならず、身は刑餘の人にならなきやならないですから、少しの油斷もならないです、こゝの所をお飲込み下すつて巧くお執成さへ下されば、不悶ではございますが、妹は侯爵の弄み物に差上げませう。』

『君が私の境遇に同情を寄せて、大事な妹を犧牲としてまで働いて下れるのは、返す〳〵も感謝の至りである、大望成功の曉は兄とも親とも思ふて、必ず此の恩返しは致すゆゑ、どうぞ惡事の露顯せんやう注意して行つて下れ。

妹を兄の側女に遣つて下れるなら、必度此方の希望は協へさすから安心して下れ。』

『では恁う致しませう、私も幸昨日お出下さつたお禮のため伺侯する考へで居つた所でございますゆゑ、貴方樣と同伴して左に右中村樓へ參る事に致しませう、其上で只今の一件を貴方から公然お談話下されば、何彼に都合が宜からうと存じます。』

『では、然う云ふ事に致さう。』

『それに就きまして、此後も何彼につけてお指揮を受けねばならない事もございますゆゑ、妹をお目通り致させたいと存じますから、お許しを願ひます。』

『私も是非會つて置きたいと思ふて居つたのだ。これから度々打合せたいこともあるから……』

かくて、山川は毒婦お君を妹と僞つて雅敎に面會させ、やがて兩人は中村樓に赴くべく連立つて南禪寺の家を出て、相語らひながら東山を指して俥を走らせた。

（三十八）

爲雅侯が首尾如何にと千秋の思で待ち受けて居ると、家扶の大山は次の室より伺候なし、

『御前、只今宇治の若樣がお歸りでございました。』

爲雅は喜と不安に胸を跳せつゝ、

『雅敎が歸つて來たか、そして首尾は甚麼樣子だ、マア〳〵近く進め、近く！。』

辭に大山は傍近く進み依つて、

『御安心遊ばせ、首尾は至極上首尾でございます、下世話に申します通り、案ずるより產むが安うございまして、外々ならぬ御前へ差上げるなら、假令お妾であらうとも苦しうないと申すのださうでございます、しかしそれは潔く承知致しました代りに、宗匠の方でも一つお願があると申すのでございます、それは餘の義でもございません、宗匠も此の京都の土地も居飽ましたゆゑ、東京へ歸りたいと思ふて居る矢先でございますから、御前の俳偕の御敵手と致してお屋敷へお連れ下さらば、兄妹共にお傍に居られますので、こんな滿足な事は無いと、斯樣に願ひますのださうでございます、此義を御聽濟下さるなら、妹君子は明日からでもお側へ差上げると申します、此儀如何斗らひまして宜しうございませう？』

爲雅は相格を崩して、

『しからば何か、妹は妹の望み通り妾に遣るが、其代り妹と一緒に宗匠も俳偕の對手として、私が屋敷へ連歸つて下れと申すのぢやのう。』

『御意にござります。』

『妹さへ予の側へ寄來して下れるなら、宗匠一人位は屋敷へ連れ歸つて、充分の手當をして遣はすから左樣申聞かせて、一日も早く妹を召寄せるやうに取斗らへ！』

『委細畏まりましてございます。恁う事が極りまするとと、宇治の若樣同道にて山川宗匠が昨日お越しなされましたお禮旁々、お目通り致したいと控え居りますればどうぞ御目通りお許し下されますやう致したう存じます。』

『ア、、宗匠が參つて居るのか、しからば直に面會致すから此方へ連れて參れ。』

『心得ましてございます。』

大山は御前を退り出たが、間もなく山川宗匠を案内して來た。

と見るより、爲雅は機嫌麗はしく、

『ヲ、宗匠か、能く來て下れた、サ、遠慮に及ばん此方へ進め。』

辭に山川は少しばかり坐り進むで、兩手を下に恭しく頭を下げ、

『早速お目通りお許し下さいまして大慶に存じます、昨日は又能社御尊來を忝ふ致しましたが、何の風情も致しませんで、誠に恐縮致しましてございます。』

『イヤ、どうも昨日は非常の饗應を受けて、那麽愉快な事は近頃珍らしい、嘸迷惑致したであらう。』

『どう仕りまして、彼云ふ茅舍へ御來臨下されましたのは身に餘る光榮と、深く感謝致しまする、殊に又今日は宇治の若殿樣より身に餘るお辭を頂きまして、誠に有難い仕合に存じます、しかしながら教育も充分に致しませず、行儀作法とても無作法女でございますれば、御意に召さない事ばかりと存じまするゆゑ、其邊は私より前以つてお詫申上げて置きまする。』

と、叮嚀に頭を低げた。

（三十九）

爲雅は少しく極惡しげに、

『どうも面目無い事を言出して、さぞ迷惑爲たであらうが、しかし早速承知して下れて忝げない、委細は大山に申付けてあるが、君の一身に就ては失敬ながら充分の手當をして屋敷へ同伴するから、安心爲て貰ひたい。』

『我任意な事をお願ひ申しまして誠に恐縮致します、實は先年以來東京に歸りたい心は矢竹に逸つて居りましたが、どうも好い機會がございませんので、今日まで も遲々致し居りましてございます、定めて御厄介で被在れさせうけれど、何分にも宜しくお願ひ申上げます。』

『予も俳句は下手ながらも好きであるから、幸ひ相當な宗匠があつたら研究爲たいと思ふて居つた所であるから、旁々都合を得たといふものだ、

予も此度は少々不快なために保養を兼ねて參つだのであるから、此の酷暑一二ヶ月を京都で遊んで、九月の末つ方歸る積りで居るゆゑ、其節同行するとも、或は後から參るとも、其處は君の隨意に爲るが宜いが、その頃までに準備は爲て置くが宜い。』

『委細畏りましてございます、未だ間もある事でございますゆゑ、其節までに準備を爲て置きましてお供を致すやうな事にお願ひ申上げます。』

と、恭しく一禮すれば、爲雅は豫て用意爲たものと見え、卓上に乘せてあつた二つの封を取出して、

『これは少かだが、祝儀の驗だ……』

と、山川に與へた、山川は有難く押戴いて一見するに、一封はお君の支度料らしく一封は自分への手當と見たれば、

『これな又數々の引出物を賜りまして、有難く拜領致しまする。』
『しからば、委細の事は大山と相談して宜きやうに計らふて下れ。』
『畏りましてございます、しからばこれにて御免を蒙りまして、委細は大山君と御相談申しまするでございます。』
『どうも遠方御苦勞ちやつたね、君子にも宜しく傳へて下れ。』
『有難う存じまする。』
三拜して御前を退いた。
そして大山の室へ往つて、委細の打合せをするのであつた。これと同時に雅敎は爲雅の室に行つた。
山川は先づ大山に向つて、
『大山樣、色々御心配を供へましたが、愈よ妹を差上げる事に致しましたから、何分にも宜しくお願ひ申します。』

シテ委細の事は貴方と相談するやうにと云ふお話でありましたが、何時からお側へ差上げたら宜しいでございませう？。』
大山は些と首を捻つて、
『左樣、御前の方では一日も早いのをお喜びだけれど、君の方でも色々準備もあるであらうから、今日から五日目と決定して置いては奈何でせう？。』
『準備と云つた處でお嫁入と云ふではなし、大した準備もありませんが、それでは猶且今日から五日目と極めて頂きませう、どうぞ御前へは貴方から宜しくお傳へを願ひます。左樣なれば今日はこれにて失禮致します、何分にも萬事宜しくお願ひ申します。』
山川は厚く禮を述べて我家に歸つた。

（四十）

我家に歸つた山川は、莞爾々々しながら、

『お君！、まあ些とお出で！急に相談爲なくちやならない事が出來たんだ。』

『然う、甚麼相談なの？。』

云ひつゝ、お君は山川の傍にぴたりと坐つた、

『イヤ外の事ぢやあないが、例の一件だがね、今日お前も知つてる通り宇治の若殿が來て、侯爵が是非お前を妾に爲たいと云ふから承諾して下れるやうにと云ふ話だから、此方は固より其れを目的に脚色だ狂言だから、へい宜しうございます、然ほど御懇望とありや差上げませう、がしかし差上げる代りには私も共に屋敷へお連を願ひますと申込むだのだ、左も右それは承諾さすから頼むと云ふ事で、あゝして一緒に侯爵の宿へ往つた所が、直樣面會して斯樣々々と云ふ談話の末、いよ〳〵お前を妾に差上げる代り、東京に歸る時は私も一緒に屋敷へ連れて歸へると云ふ約束が成立つたのだ、すると侯爵の手らお前の支度料と、私への酒肴料と

二つの封を下れたのだ、歸る路すがら開いて見ると、有繋は華族だ、お前の支度料が五百圓、私への酒肴料が五十圓、合計五百五十圓の金子を下れたよ。』

云ひつゝ、奉書紙に大水引を掛けた封二つを取出した。

お君は少し驚き顏に、

『いくら私が役者になつて働かうとは云つたものゝ、いよ〳〵那樣相談が極るのなら、一言位聞かして下すつても宜いぢやありませんか、人形でも遣るやうに隨分お手輕なお話ね、何分どうかお手柔かにお願ひ申しますよ、ホ、、、、

まあ、それはそれとして、私は昨夜の樣子で大抵宜からうとは思ましたけれど、道麼に早く運ばうとは夢にも思はなくつてよ。華族の若樣なんて云ふものは、眞個まだ世慣ないのね。』

『しかし、それはどちやあるまいと思つたが、眞個お前は恁ういふ事に掛けちや宜い腕だね、華族の坊樣でなくても、お前の其の愛らしい眼で樣子ありげに眺めら

れた上に、變な素振でもされやうものなら、大抵な野郎はビリ〳〵と電氣に打たれて正体なしだ、眞個私も恁う早く事が運ぶとは思はなんだ。』

『油を掛けるも宜い加減になさいよ、人馬鹿々々しい。それは然うと何時から往くのか、それはまだ極らないの？。』

『大極さ、今日から五日目に往く筈になつたんだ。』

『今日から五日目に？、大層早いことね。』

『御前は今日からでも欲しいのだが、色々準備もあらうからと、家扶の取扱ひで五日目と云ふ事になつたのだ。』

『本當に華族なんて助倍なものね、いけ好かない。』

『てな事を云つて、も、坊樣らしい處が氣に入つて、私を邪魔者にして宇治川なんぞは御免蒙むるよ、アハ、、。』

『冗談ぢやありませんよ、私が好き好むで行くんぢやあるまいし、これも皆な貴方のために可厭ながら往くんぢやありませんか、可愛相だと察して下さいな。』

（四十一）

『しかし、五日ばかりの中に迚も充分な支度なんか出來るもんぢやないが、奈何したもんだらう？』

と、山川が眞面目になれば、お君も急に眞顏になつて、

『眞個五日ばかりぢや爲樣がないのね、せめて十日ありますと奈何にか間に合ふでせうけれど、爲方ありません、若も間に合はなかつたら差詰入用の物だけ註文して、あとは又其から製へる事に爲ませうよ、それにアイ此間出來上つたばかりの着物や帶もあるんですから……それよりか金側の時計と、寶石の入つた糸輪の指環を買ひませう。』

『金時計なんか先方へ往つてから、お前の腕で一つ二つ呪ひをかけやうものなら、

二つ返辭で買つて貰へるから、何も慌て買うがものは無いさ。』

『然う云へば着物だつて然うぢやありませんか、折角貰つた金子の使ひ道がありませんわ。』

山川はニヤ〳〵と笑つて、

『貰つた金子の使ひ道がない、何も心配爲なくても何程でも引受けてやるよ。』

『貴方は本當に虫が宜いのね、可厭ですよ貴方に金子なんか持たすのは。』

『なぜ？』

『なぜッて、私のやうな我任意女を苦しい勤に出して置いて、其の跡で甚麼樂みをなさるか知れたものぢやないわ。』

『冗談ぢやない、お前に大役を頼みながら、那樣巫山戯に所爲をするものか、そりや安心だが、先づ支度は間に合はなきや、何も今日や明日に東京に行くと云ふぢやなし、一二ヶ月は此方に居るのだから、其間には何でも出來されるから宜いと

して、どうかあらん限りの手管を出して、旨く御前を丸め込むで、首尾克く屋敷へ乘り込めるやうに爲て貰はなきやア、折角の骨折が虻蜂取らずになつて了ふからね、昔と違つて此の開けた御代に、侯爵華族の家を横領爲やうと云ふのだから、容易な事で爲果せる仕事ぢやありや爲ない、どうしても私とお前が屋敷の中へ入り込むで、それからボツ〳〵仕事を始めるより外に手段はないのだから、京都に居る中にお前の腕で御前をスツカリ蕩し込み、何でも彼でもお君でなくちやア夜も日も明けないと云ふ程に寵愛を受けなきやア、東京の屋敷に往つた時に、後室や家令などに故障を云ひ出された時に困るからね。肝心な御前の氣に入つて、お君でなくちやならないと云ふ事になりやア、誰が何と故障を云つた所が、鋼鐵の戰闘艦に乘つたも同じことで、先づは大丈夫と云ふものだ、其所をお前が能く飲み込むで居て下れなくちや困るのだ。』

『本當にさ、警察の行屆いた今日に、何百萬圓と云ふ侯爵家を乘取らうと云ふのだ

から、並大抵な仕事ぢやありませんよ。私も貴方と云ふ相談柱があるからこそ、大膽に受合ふは受合つたもの、、首尾能やれりやよいがと眞個心配ですわ。』

『なあに、いくら警察制度が行届いて居らうと、甚麽に法律が嚴重からうと、罪跡を晦ます途はいくらも有るに相違ない、早い設へが、お前の宇治川の一件だつて、旨くやつたからこそ、恁うして安閑と爲て居られるぢやないか、まあ〳〵那樣心配は爲なくても宜いから、精々御前の方を旨く頼むよ。』

『御前の方は私が引受るから大丈夫ですよ、安心して居て下さい。』

（四十一）

お君が御室侯爵の側妾に上るべき約束の日は早くも來た。侯爵は過日お君を見初めて終夜煩悶して睡られなかつた如く、昨夜はまた今日と云ふ愉快が頭腦を支配して終夜マンヂリともせず、午前の四時の時計が鳴ると床を離れて、暫く庭内を散歩し

て新鮮の空氣を呼吸し、やがて朝餉が了ると俥を命じて理髮所に赴いて理髮をなさしめ、それより入浴して旅館に歸ると、衣紋を改めて、今や遲しとお君の來るを首を伸ばして待ち受けて居た。

最早八時を過ぎ、九時をも打たんとする時刻になつても、まだ來ない、爲雅は堪へられなくなつたものか、次に控えた大山を召して、

『ね、山川は確か八時過に來ると云つたね。』

『はい、確か左樣申しましてございます。』

『もう何時だ。八時は先刻打つたやうに思ふが……』

大山は懷中時計を出して些と眺め、

『御意でございます、もう十五分で九時でございます。』

『それに今に來んと云ふは奈何したのだらう、午前の八時と午後の八時と思違ひを爲たのぢやあるまいね。』

『確に午前八時過ぎと申しましたから、豈夫左樣な事はあるまいかと存じます。』

『しからば、今朝になつて何か差障の事でも出來したのぢやあるまいか。』

『左樣な事は萬々あるまいかと存じます、何故かなれば、若も故障でも出來ましたなれば、早速其趣をお詫に參る筈でございます、しかるに何の沙汰も致さない所を以つて見ますると、故障などの出來た理ぢやございませんが、何を申しましても御婦人の事でございますから、御支度だの何のと種々御用の多いものでございますゆゑ、必然那樣事から遲くなつたかと存じます、いづれに致しましても今暫く待受けまして參りませんやうでございましたら、私がお迎へに參りまするでございます。』

『なる程、それも然うだね、女と云ふものは頭飾だとか化粧だとか、男と違つて種々間取るものだからね、早く來る積りでも猶且遲くなつたのかも知れないね。では今暫く待つて見やう。』

『今暫くお待ち遊ばしますと、必ず參る事と心得まする。』

『時に料理などの事は總て準備か整ふて居るだらうね。』

『御意にございます。何時でも差支ないやうに申付けてございます。』

『雅致にも來るやうにと云つて置たが、奈何して來んか知ら。』

『若樣は、お朝も遲いでございませふし、殊に御遠方で被在いますゆゑ、奈何致しましてもお遲くなりますでございませう。』

かゝる談話の中に、俥の音賑はしく玄關の方に着いた樣子。

兩人は言合した如く聽耳を立てた。

間もなく女中が來て、山川の伺候した旨を告げた。

同時に大山は玄關に出迎へて、やがて設けの室に案內したが、此時のお君の姿は、何と形容して宜いか、形容の詞に苦しむばかりの美しさであつた。

（四十三）

侯爵御室家の家令は清川道恭と云つて、侯爵家譜代の臣で、大殿在世の頃から家令職に擧げられ、公私の別なく、苟くも侯爵家に係る事は、總て清川の裁斷に任せられて、大殿逝去の後は一入重用されて、內外の信用を一身に荷ふ身とはなつた。

年齡は五十七で、どちらかと云へば、少し舊弊に傾き過ぎる嫌ひはあるが、其の舊弊な處が清川其人の生命で、一旦恁うと信じた事は何處までも貫くと云ふ風で、就中御家のために害毒を流す如き事でもあれば、大殿に對つてさへ形を正し色を犯して苦諫するが例で、潔く諫を用ゐらるれば、感涙を流して打喜び、自分の無禮過言の罪を叩頭して詫るほどであつた。が、若も諫めを採用されない時には、老の兩眼に赤誠の涙を流し、身命を賭して諫言するが例で、大殿も其の忠誠に愛て何時も其の諫を容れられた程である。

例も茶色木綿の紋附羽織に折目正しい小倉袴を着けて、寒暑を問はず帶の間に必ず扇子を爽み、白髮頭を五分苅に苅り込むで、擊劍と柔術とに鍛へ上げた自慢の手を膝の上に行儀正しく載せて、嚴然たる態度で坐つた樣子を見れば、坐に古武士の俤が偲ばるゝのである。されば爲雅侯などは、現在の母なる三輪子の方よりも、此の清川が怖しくて、何を爲るにもこの清川の眼に觸れないやう、耳に入らぬやう密に事を爲が例である。

曲つた事が大々的嫌ひで、曾て少ばかりの物を買つた時、一錢五厘の剩錢を貰ふべき所へ、生憎五厘錢がなかつたゝめに、一錢五厘五毛と云ふ剩錢を出した、すると清川は五毛の金錢でも受取るべき由緣なき金錢は受取らぬと、到頭近隣で取替さして當然受取るべき一錢五厘の剩だけ受取つて歸つた事がある。一事が萬事、何をするのでも此寸法で事を處するゆゑ、侯爵家の財產の如き清川の手に保管されるやうになつてから、僅に十七八年の內に、殆んど三倍からの財產となつた。

かゝる性質であるから、自分が頂くべき給料の如きも、遠慮なく頂く代り、他家の家令どもが主家の財産を掠めんとする如き、不正な慾心などゝいふものは微塵もなく、一厘、半毛と雖も餘分の金子などを自由に爲たことは曾てない。

けれども月々頂く給料の中から、節儉に節儉を加へて貯畜した財産が、既に數萬圓の多額に上つて、左も右も中流以上の生活は爲し得らるゝ財産を有して居る。

宅は赤坂北町の一丁目で、街路よりは少しく奥に入つた閑靜な事には此上もない塩所である。

家族は妻の時子に、長男の道輔、長女の菊野の四人、外に女中が一人居るばかり。

されど長男の道輔は海軍中尉で目下出征中、長女の菊野は侯爵家の令嬢蓉子の御相手として共に華族女學校に通學し、宅へは歸らず、初中終侯爵家に仕へて居る。

（四十四）

某夜の事であつた、清川は侯爵家から歸つて來ると、何か思案に餘る事でもあるのか、例ほどの元氣もなく、晩酌も酌まず、夕飯を匆々に濟まして、己が室に閉籠つた。

妻の時子は良人の身の上を氣遣ひて、其室に入り、

『貴方、御氣分でもお惡いのぢやありませんか、何だか元氣がお在なさらないやに思はれますが……』

と、問ひ掛けた、

道恭は事もなげな語調で、

『なあに、氣分なんか惡くはないさ。顏色でも惡いか。』

『お顏色も左程惡いとも思はないですが、お好な晩酌もお上りなさらないから、必度御氣分でもお惡いのかと存じました。』

『御酒はお屋敷で頂いて歸つたから、それで舍したのだ。しかし今晩は早く寢むか

ら直に床を取つて下れ、そして暑くるしいから蚊帳は釣らないでも可いよ。』

『よろしうございます、直に展べます。』

時子は心配した良人の身の上は然程な事もなかつたゆゑ、安心して床を敷くべく彼方へ去つた。

濟川は、妻の時子には然り氣なく云つたものゝ、何か容易ならない心配事のあるらしく、默然と腕を拱いて又も思案に沈むのであつた。が、やがて時子の床を敷つたと云ふ知らせに、思案に暮れながら床に就いた。

就蓐してからも、まだ種々と考へ通して居つたが、いつしか思案に疲れて夢路の境に入つた。

夏の夜の更け易くして、かれこれ十二時前後かとも思ふ頃、頻に苦しさうな聲がするので、時子は搖り起して、

『貴方、貴方、奈何かなさいましたか。』

其聲が耳に入つたのか、道恭はハッと驚いて目を覺ましたが、荷も四邊を氣遣ふ如く、嬰々と見廻すのであつた。

時子は重て、

『奈何なさいました、夢にでも襲はれなすつたんですか。』

云ひつゝ枕頭の火鉢に掛けた鐵瓶の湯をコップに注いで、

『サア、お湯を一口召上つて御覽なさいまし、少しは氣が沈着でございませう……

マアぴッたり汗をお出しなすつて！』

と湯を進めて汗を拭ひやれば、道恭は湯を一口飲むで胸のあたりを撫で下ろし、漸く正氣づいた如く、ホッと太息を洩した。

『何か囈言でも言つたかね。』

『いゝえ、囈言は仰やらないやうでしたけれど、大層唸されなすつたのです！。』

『ふむ、然うだらう……吁々可厭な夢を見るもんだ。』

云つて、夢の跡を追想する如く腕を組むだまゝ默然として思案に沈む。

時子は心配顔に。

『久しく夢なんか見た談話もなすつた事はないに、本當に可怪な事ですね、唸されなすつたりなんかして、何か恐ろしい夢でも御覽なすつたんですか。』

と、樣子聞きたげに問へば、道恭は組むだる腕を解くと共に、

『奈何も可厭な夢を見るもんだ、どうぞ變つた事が無けりや宜いが、思ひ出しても慄乎とする。』

今更らしく可厭な顏をする。

（四十五）

『夢は五臟の患ひと云ひますから、何んな夢を御覽なすつても、豈夫夢のやうな事がある氣遣ひはございませんけれど、しかし惡い夢は成るたけ早く話して聞かせるものだと云ひますから、どうぞ話して聞かせて下さい。』

と、慰さめ顏に時子が云へば、

『五臟の煩ひには相違ないが、しかし夢にも種々あつて、昔から夢の感應で不思議の現象があつた事は、澤山に物の本などに書遺されて居る。殊に實夢、虛夢、正夢、想夢、吉夢、惡夢などゝ云つて、夢に依つては等閑にされない夢もある。しかし私が今見た夢などは、先づ名を命けるなら惡夢とでも云ふのであらうが、如何にも正々と現はれて、奈何考へても夢とは思はれない。が、惡夢と氣が附いた上は猶且話した方が氣地もスッカリするから、話して聞かせやう。モウ少し燈心を搔立てゝは奈何だ。』

昔を偲ぶ丸行燈に少に光明を放つて居る燈火を、時子は搔立て了つて耳を傾けた、時計が淋しさうにチンと一時を告げた。外は風が出たらしく雨戸が亂髮でゞも撫でるやうにサラ〳〵と音がする。

『夢と云ふのは外ぢやない、京都にお出になつてる御前の身の上だ。

或日の事御前が大山をお連になつて南禪寺邊へ御散歩にお出掛なすつたのだ、すると誰の棲居とも解らないけれど、余程風雅な建方な家が空家になつて居て、疊も備後表に高麗縁の新らしいのが敷いてある、襖一つでも古代更紗のなか〳〵洒落た品が用つてあつて、如何にも涼しさうに見えるので、足も疲れが出た所であつたから、主こそ居ないけれど、恁うして明放してある程だから、其中には鱚つて來るだらう、暫く休まして貰はうぢやないかと有仰つて、内へ入つてお憩みなすつたのだ。するとや〵寸間した頃、其處が夢だから何處から歸つて來たか、其處は判然爲ないけれど、今でも其顏は目に殘つて居るが、年齡の頃なら十八九、二十歳頃でもあらうかと思はれる。些と見ると何處か良い家の令嬢でもあらうかと思ふ、上品な美しい女が現はれて、御前を見ると、サモ馴々しい樣子で、御茶を進めたり御菓子を進めたりして、大層叮嚀に待遇すのだ、御前は留守中へ

無斷で休まれたんだから、小言がましい事でも云ふかと思つて居られたのが、打つて變つた叮嚀な待遇ひと云ひ、殊に水の滴るやうな氣高い令嬢が馴々しく辭をかけるので、大層御滿足の樣子で、色々とお話の末其の女を御旅館へお伴れになつて、有う事か有るまい事か、到頭徒然のお伽をお爲せなすつたのだ。すると眞夜中頃になると、大層苦しさうなお聲をなさるから、大山が伺つて見ると、彼の美しい女は頭だけは其まゝの姿をして、首から下は一抱へもあらうと云ふ、ギョツとする程の白い蛇で、鱗をピカ〳〵光せながら御前の軀をグル〳〵廻いて居るのだ、そればかりかと思つて居ると、大方雌雄でもあるのか、眞黑な大きな蛇が火のやうな赤い舌を出しながら、今にも御前を一呑に爲やうと、枕頭で樣子を窺つてるのだ、大山も現在御前の危うい場合を見ながら、大きな蛇が二尾も居るんだから、奈何する事も出來ないで、旅館の人々を起して大騷ぎを始めたのだ。』

云つて、冷めたる湯に口を濕した。

（四十六）

清川は語を繼いで、

『何しろ有名な旅館の事だから、大勢の人々が大騒ぎは爲るけれど、誰あつて御前を救はうと云ふものは一人もない、唯モウ小田原評定に時を移して、鐵砲で打留めやうとか、日本刀で斬らうとか、槍で突き殺さうとか、區々の評議ばかりで徒に時刻を過してる中に、御前は呼吸が苦しくなつたものか、今にも息の斷れるやうな哀な聲を出して、救をお呼びになる、一同はワイ〳〵と大騒ぎをするが、自分の生命が欲しいから手を下すものは一人もない、モウ御前は眞青にお爲りなすつて、聲もお出しにならず、現世の人では無いやうな在樣にお爲りなすつた、ところ、何處から現はれたのか、一人の筋骨逞ましい若者が現はれて、突然短銃

を擬して今にも打ち殺すやうな勢ひ示すと、二尾の蛇は殘念さうに其若者の顏を睨むで、何處を奈何して出たものか、姿は搔消すやうに見えなくなつて了つた。』

時子は息を凝して聞いて居たが、此時ホッと息を繼いで、

『何てまあ怖ろしい夢でせう、私身の毛が悚立ちました。それから御前は奈何遊ばしましたの？。』

『それから一同が寄つて集つて御前の御介抱を爲たけれど、蛇の毒氣でもお受けになつたのか、熱が激しくッて囈語ばかり仰しやるから、直樣人を走らせて有名な醫學博士二人も迎へて診察爲て貰つた所が、二人とも生命に障はないから安心するが宜いと云ふ事で、其趣きがお屋敷へ電報で知らせがあつたから、取敢へず私が御見舞旁京都へ往つて、外にも容敷のならん事もあつたから、大山を散々叱り付けて、御主人のお供は何がために致すかと極めつけて居る所でお前に起されて目が覺めたが、余り妙な夢だから、何か御前の御身の上に變つた事でも無け

りや宜いがと、心懸りでならないのだ。』

夢物語を聞き了つた時子は、云ふべからざる惡感に打たれて、

『本當に妙な夢てすね、余り夢なんか見なすつた事も無い貴方が、奈何して那樣可厭な夢を御覽なすつたでせう。』

『だから私も變に思つて、奈何も心懸りでならないのだ。それに何程夢を見たつて、唸されるなんて事は始めてだからね。』

『ですけれど、御前の身の上にお變りなすつた事でもあれば、直にお屋敷へ電報が參りますから、那樣に御心配なさらなくても宜しうございますよ。それに夢は逆夢と云ふ事もありまするから殊に依つたら悉皆と御病氣が御全快なさる兆かも知れませんよ。』

道恭は、やゝ氣が沈着たのか、此時始めて煙草を喫して、

『どうか夢が逆夢になつて、御病氣でも御全快なさるのなら宜いが、お供の大山が見掛に依らん不埒者だから、ヒョッと遊女町などへお供を爲なけりや宜いがと思ふのだ。』

『例と異つて御病氣中で被在るんですもの、那樣事は無いでございませう、ヲヤ最う彼是二時になりますよ、お休みなすつては如何でございます？』

『うむ、夢物語でツイ永くなつた、私も寢るがお前も眠かつたらう、サア休むが宜い。』

『では、失禮致します。』

（四十七）

毒婦お君は終に御室侯爵の愛妾となつて、お傍に冊く身となつた。

年齡こそ若けれ、抑も戀の逢瀨を渡り初めしは十五の暮にて、今年十九の秋を迎へるまで、世の辛慘を嘗め盡し、有と有ゆる惡事に慣れた阿婆摺女とて、寸分の透も

あらばこそ、人を射るは馬よりの譬に洩れず、御供役たる大山には辭を低うして、些細な事まで一々相談をなし、荷めにも我任舞に事を振舞ふではなく、何一つ買へばとて其の半は先づ大山に與へると云ふ在樣ゆゑ、大山は早くもお君の魔術に醉はされて、お君樣、お君樣と、尊敬を拂ふに至つた。馬にして此の如く射落したからには、其に乘りたる侯爵は與し易しと、高を括つたお君は、日中などは如何にも高家の令嬢か、若くは若き令夫人の如く、側にこそ待つて居るけれど、侵すべからざる氣品を示して、侯爵の話かけらるゝに、辭少なにお相手する位で、如何にも優しくそして虫も殺さぬ樣な容子であるが、扨夜の幕になつて床に就くが否や、これが日中侯爵の側に侍して居た君子かと思はるゝ位、總ての態度が一變して、浮世馴れない、而して戀に初心な爲雅侯を、掌上の珠と弄び、莫連女の本性を看破されない程度の下に、拗ても見せれば、甘へても見せ、嬉しがらせても見れば、殺文句を列べても見る、舌一枚と、五尺足らずの小さき軀をもつて、閨中の情を濃ならしむる其の秘術の巧みな事は驚くべきもので、其の結果は忽ちにして爲雅侯を軍門に降伏せしめ、お君ならでは夜も日も明けぬ事になつた。

或夜閨中情緒濃かなる時であつた。君子は雌鹿の如き愛らしい眼に媚を堪へて、

『ね、御前樣、若や東京のお屋敷へお連れ下さいました節、お後室樣や、御親戚の方々から、那樣身分の賤しいものを、屋敷の中に置く事はならないゆゑ、今日限り暇を取らせと有仰いましたら、私はそれ限りお見棄てなさるのでございませうね。こんなに優しいお情に預りまして、お嬉しう存じて居りまするのに、左樣な悲しい境涯に沈まねばならないかと考へまするとと、何だか今より涙が零れます。』

と、密と涙を緋縮緬の長襦袢の袖に拭ふ眞似をすれば、爲雅は其の背を撫でながら、

『なにが泣く事が要るものか、設へ母が何と云はうと親戚が故障を述べやうと、嚴しやの家令が諫言を致さうと、予が現世に居る限りは、誰が何と申しても、お前を見捨てる氣遣ひはないから安心するが宜い、若も强ひて左や右面倒な事を申す

ものがれば、誰彼の容赦はない、皆な屋敷から逐ひ出してやる。』

『今でこそ左様に仰せられますけれど、私のやうな不肖女は、永くお側に居りまする中には、必然お可厭になりまして、お暇を下さるのは眼の前に見えて居りますゆゑ、どうせ永くお側に冊く事が出來ないものでございますなら、お情けの深く重りませぬ中にお暇を頂いた方が、まだしもお別の悲みが少ないかと存じます。』

『どうしてお前が可厭になるものか、設へお前が暇を下れいと申しても、予の方から遣すものぢやない、那樣事は必ず心配致すな。』

（四十八）

お君は一入聲に情を含み、

『私、お屋敷へ上つてからの事思ひますと、何だか哀しくなつて、參ります。』

又も涙を袖に拭ふて、

『ですから、眞個私を行末永くお側に置いて下さるお心がございますなら、どうぞ私の安心するやうに、御前樣の御直筆で其事をお認めなすつて下さいませんか、でございませんと、恁うしてお側に居ながらも、些とも安心致してお仕へ申す事が出來ませんゆゑ、自然御氣に召さないやうな不行屆が出來ないとも限られません、左樣な不調法がございましては何より殘念に存じます。』

と、情を語る如き艶かしい眼色で、訴へるやうに爲雅の顏を見れば、

『なに、予が行末見棄ぬと云ふ證を認めてやれば、安心して側に居ると申すのか、宜いとも、宜いとも、那樣事なら何時でも認めて遣はす、安心するが宜い。』

お君は溢るゝばかりの愛嬌を堪え、

『有難う存じます、うれさへ認めて頂きますと、眞個安心して御奉公致します、ではどうぞお忘れにならない中に、明朝お認め遊ばして下さいまし。呉々もお願ひ申します。』

『うむ、明朝必らず認めて遣はす。そしてお前が安心致すために、萬一暇を遣はすやうな事があれば、一生不自由をせんやうに三萬圓の財産を遣はすと云ふ事を書添へてやらう、それならば猶更安心で宜からう。』

『はい、然う認めて頂けば這麼結構な事はございませんけれど、其も是もみんな御前様をお慕ひ申すからの心配ゆゑでございますれば、どうぞ可愛相だと思召してお見棄ないやうにお願ひ申します。』

『予が戀ひ焦れて貰つたお前を、何で見棄て宜いものか、お前ばかりぢやない、東京に歸る時は宗匠も共に歸る約束だから、必ず心配せんが宜い。』

かくて其夜は喃々たる情話密かに、樂しみ多き夢路に入つたが、翌朝になるとお君は爲雅に迫つて、昨夜約束した一書を認めさせ、嫣に微笑みつゝ、

『本當に私こんな嬉しい事はございません、これをお認め下さるならば、設へお見棄てなさるまでも、見棄てられない事だと安心致してお側勤が致されます、どうも有難ふ存じます。

就きましては、誠に我任意なお願ひでございまするが、御前にも今日は伏見へ御散歩遊ばすやうなお話しでございましたが、若し伏見へお出で遊ばすのでございますれば、其の御留守中に些こ宅まで遣つて頂きたうございますが、如何でございませう？遲くとも夕方までには必ず歸つて參りますが……』

『モウ宅が戀しくなつたのか。』

『いえ、然う云ふ理ではございませんけれど、呉服屋へ種々注文して置いた物もございまするし、兄もお屋敷へお供してからの事など、大層心配して居りましたゆゑ、此のお墨付を拜見させて安心させたいと存じまして。』

『では、往つて來るが宜いけれと、しかし必ず夕方までには歸つて來んければ困るよ。』

『はい、必ず歸つて參りますゆゑ、どうぞ寸時お暇をお願ひ申します。』

『參つたら宗匠へ宜しく傳へて下れ。』

『有難ふ存じます、左樣申聞せまするでございます。』

（四十九）

『兄さんお宅に在らして？。』

と、莞爾笑ひながら山川孤舟が宅に入つて來たは、お君である。

見るより山川は、

『馬鹿にしてやがる、兄さんが聞いて惱れるあ、可厭に優しい聲を出しやあがつて。一体今頃時分奈何して來たのだ。』

『奈何してつて、マア坐敷へ往つて悠然話しませうよ。』

云ひつゝ、奥の坐敷に行けば、山川も共に坐敷に入つて、

『サア先づ那樣行儀正しい風を爲ないで、帶を解いて風を入れては奈何だ、外は隨

分暑いだらう。』

『隨分暑い事は暑いけれど、俥の上ですから些ほどでもなかつたんです。』

云ひつゝも、藤色縮珍の單帶を解いて、眞紅の裾除を憚りなく露はして、扇子を隻手に不規律なく坐れば、山川は、

『機嫌を取損なつてお暇が出た理ぢやあるまいね。』

『馬鹿に爲なさんなよ、相手は誰です、憚りながら姫樣お君さんですよ、華族のお坊樣位に暇なんか出されてお堪り小法師があるもんですか。』

『とは思つたが、餘まり突然やつて來たから、何か變つた事でも出來たのぢやないかと思つて。

『奈何だ御前は嘸喜んで居るだらうね。』

『喜ぶも喜ばないもお話になつたものぢやない、此間から一度お前さんの顏を見て、氣の保養しに來ようと思つて居たんだけれど、飴にでも食付かれたやうに、全然

夜も晝も側に附限りで放さないんだもの、いくら芝居を爲に往つてるとは云ふものゝ、眞個焦つたくて堪らないんですわ。』

『それに今日は奈何して出て來たんだ。』

『今日は大山と一緒に伏見の稻荷樣へ參詣しながら、久し振で散歩に出掛けると云ふ事だから、種々〳〵呉服屋へ往文して置た物もあるし、兄さんにも御前から可愛がつて頂く事を話して安心させたいから、御留守中に些と遣つて下さいと賴むで、やう〳〵夕方まで暇を貰つて來たんですわ。』

『然うか、そりや宜かつた、實は私も今日か明日かは一度顏なりと見に出かけやうと思つて居たのだが、恁うしてお前が來て下れりや這麼都合の宜い事があるもんぢやない、どうだ旨く注きさうかい。』

『大抵旨く行くだらうとは思ふけれど、色々と樣子を探つて見るに、私等が屋敷へ行くに就いては、大分故障が出さうな樣子なんです。それは御前のお母さんなり、

親戚なり、又清川と云ふ正直頑固な家令なんです、そこで萬一の時の用意に、昨夕旨く御前を騙かして、奈何あつても見捨てないと云ふ書附を書したのです、すると御前の云ふには、見捨ないと云ふ書付ばかりでは、お前が不安心だらうから、萬に一つも見捨てるやうな事があつた場合には、三萬圓の金子を下れて、一生不自由のないやうに爲てやると云ふ事を、しかも直筆で記いて下れたんですよ。どうです、お君さんのお腕は悽いもんでござんせう。』

自慢しながら、侯爵から貰つた彼の書付を出した。

（五十）

約定書

山川は、お君が侯爵から貰つた書附を取り上げてるに、

其方儀此度予の妾として召抱へ下は、設へ一家一門より如何なる故障申出し共、

斷じて排斥し、暇を遣はす等の事は決して致すまじく、若予の都合上合意の上暇を遣はしい場合は、將來の生活費として金三萬圓を與ふべし

右爲念之約定書差遣しい也

八月廿日

山川君子へ

侯爵御室爲雅

と、記してあつた。

『なる程、有繋はお君さんだ、感服々々、この書付さへありや、大丈夫屋敷へ乘込めやうと云ふものだ、若又乘込めない場合には三萬圓と云ふ金子は、否が應でも取外れはないのだから、それさへあればお前と二人遊んで行く分にや差支へはない、大きく侯爵家を横領するか、小さく三萬圓ばかりの金子で我慢するか、何方にしても演りかけた芝居の骨折賃には有付いたと云ふものだ、しかし能く這麽書付を書いて渡したね、何と云つても華族の坊樣は坊樣だね。』

『だつて、此處まで漕付けるには、並大抵な骨折ぢやありませんわ、考へると可厭になつちまひます。』

『お前の事だから、嘸旨く機嫌を取つてると思ふや、いくら得心盡で遣つたとは云ふものゝ、眞個妬けて寢られない晩がある。』

『私だつて然うだわ、先方では慾のために爲方なしい機嫌取つてるんですもの、お前さんの側に居て、面白可笑暮したらと、日に幾度思ふか知れや爲ないわ。』

『ヲツと、久し振で談話に實が入つて、スツカリ忘れて居た、モウ先刻十二時を打つたから、お腹が減いたらう、何か澤山御馳走爲やうね。』

と、思出したやうに云へば、

『お腹なんか減きやしませんわ、宿を出る少し以前に朝飯を食べたんですもの、まあ御馳走なんかお舍しなさいよ……ヲ、私こそ忘れて居ました、家へ始めて行くんだからッて、坊樣（爲雅の事）でも氣が注いたかして、お土產を持つて行

けッてお金子を十圓下れたの、ですから途中でねビールと、玉子を買つてお土産に持つて來ましたの、冷しにかけてお上りなさいな。』

『そいつは閉氣だ、早速冷して置いて久し振に相對で飲むと爲やう。』

『私ビールなんかあまり飲みたくもありませんから、久振に澤山お顏見せて下さいな。』

『お安い御用だが、どうだそれでは暫らく横になつて話さうぢやないか。』

『はあ、少し横になりませうよ、何だか坐敷牢の中からでも出て來たやうで、無性に嬉しくて疲れが出ましたわ。』

『待て〳〵、ではビールを冷して置いて、枕を出してやらう。』

と、山川は起つて厨屋の方に行つてビールを冷しにかけ、やがて舟底枕の赤く塗つたを手に持つて、

『サア〳〵枕だ、今日は少し風もあるから宜い心地だ、横になつて寛り話すと爲やう。』

『吁々、生命が延びたやうだ、猫を冠つて居るのは眞個苦しいわね。』

と、兩人は誰し遠慮もあらばこそ、轉りとばかり横になつて、樂しさうに語るのであつた。

（五十一）

御室爲雅と大山豊春は、久し振に記外へ散策して伏見稻荷へ詣で、其の歸るさに山城館と云ふ料理店に入つて、日中の暑さを避けながら晝食の準備を命じた。

御室侯爵と知るべくもあらぬ山城館では、其の風采を見て左に右、上流の紳士として樓上の風通しの宜い最上等の室に案内した。

遙か隔てゝ稻荷の森を右に望み、前には眼界一帶に青田を眺めながら、

『近頃久しく室外の散歩を怠けて居つたが、恁うしてブラ〳〵と歩いて見ると、猶

且氣分が清々しくなるやうだ、どうしても運動は爲んけりやならない。』

爲雅が云へば、大山も、

『手前のやうな健康体の者でございましても、運動致しますると、非常に元氣が宜くなるやうに存じますから、御前のお軀でございますると、忽に効驗が見えますでございませう。

手前の氣の故かも存じませんが、君子樣がお越しになりましてから、御病氣も大層お宜しいやうに存じますが、左樣なお心地は致しませんでございますか。』

『うむ、然う申せば、予も然う云ふ感じがする、茲十日ばかりと云ふものは、殆んど病氣は忘れて了つた。』

『何しろお慶たい事でございます、此の御樣子でございますると、二ケ月も御滯在遊ばんでも必然御全快遊ばさる事と考へます。

其れ是れに拘らず、君子樣のお身の上を、御歸京前に豫じめお屋敷へ內通爲て置

きませんでは、あまり突然でも却つて左や右と面倒が湧いて出は爲んかと愚考致しまするが、如何なものでございませう？』

爲雅は葉卷莨を悠々喫しつゝ、

『然うさね、私も其事は思はんちやないがね、あまり早くから知らせると、却つて種々な故障が起り易いものだから、猶且歸る間際になつて突然知らせた方が宜からうと思ふのだ。』

『御意にござります、致しますると大凡御歸京が極りましてから通知する事に致しませう。』

談話央へ、女中は新鮮の肴と氷に冷したビールを運んで、杯洗に浸したコップを取上げて、泡立つまでビールを注いで進めた。

侯爵は、グッと飲むで下に措き、眼を外の方に移し、

『どうだ、外は隨分暑さうだね、マア寛り休むで少し日が鈍くなつてから歸ると爲

やう。』

大山もコップを手にして、

『只今が丁度日盛りでございますから、なか〳〵戸外は厳しうございます、御寛り遊ばして片日陰になつた頃からお歸り遊ばす方が宜しうございます。』

侯爵は、傍に女中の侍つて居るも顧着せず、

『しかし豐春、お前は君子を何んと思ふか知らんが、有繋に宗匠の妹だけあつて、下様で育つたとしては行儀作法も心得てるね。』

『どう致しまして、行儀作法ばかりぢやございませんで、お若いのに萬事に同情がございまして感心なお方でございます、失禮な事を申上げるやうでございますが、設へ御令夫人をお迎へ遊ばしても、君子様以上のお方は眞個稀と存じます。』

『では、モウ奥は貰はん事に致さうよ、ハ、、。』

かくて主從は四方八方の物語に時を移して、やゝ日が傾いた頃歸路に就いた。

（五十二）

八月の某日の事であつた、御室家の家令清川道恭が玄關を訪づれた一人の若者がある。年の頃二十四五の、色の小白い背のスラリとした痩肉の男で、身には白大名の木綿の單衣の上に小倉織の單帶を締め、微塵くづしの白つぽい羅の羽織を着て、其の品格の何邊やらに商人風が微見えて居る。

『お願ひ申します。』

訪ふ聲に、取次に出たのは召使の婢であつた。

『誰方さんでございます？』

若者は麥藁帽子を手早く脱して、辭より先に些と腰を折つて一禮をなし、

『私は町田長次郎と申すものでございますが、旦那様はお宅でございませうか。』

『はい、旦那様はお屋敷へお出になつてお留守で被在います。』

『奥様は御在宅でございませうか。』

『はい、奥様は被在れます。』

『では、失禮でございませが、山城の宇治の松右衛門の家から參つたものでございますが、些とお目通がお願ひ申したうございますと、お取次が願ひたうございます。』

『山城の宇治の松右衛門でございますね。』

『はい。』

『そして貴方のお名は何とか有仰いましたのね。』

『私の名は町田長次郎でございます。』

『では、暫くお待ちを願ひます。』

と、婢は奥に入つたが、間もなく現はれて、

『どうぞお通り下さい。』

若者は婢に連れられて奥床しい一室に案内された。

待間程なく、入つて來たのは清川が妻の時子である、五十二三の上品な婦人で、髪は品の良い小さな圓髷に、蚊絣の帷衣の上に鐵色無地の博多織の單帶を、キチンと結び、靜に坐に着いた。

町田はそれと見るより容を正し、

『これは奥様で被在いまするか、始めてお目通り致します、私は山城伏見のものでございまして町田長次郎と申すものでございます、暑の砌でございまするが、御健勝でお慶たう存じます。』

時子は愛嬌よく、

『彼の宇治の松右衛門の家からお出になつたのは貴方ですか、ヲヤ然うですか、松右衛門は夫婦共に健康に暮して居りますか……然うですか書面は能く寄來して下れますけれど、此方に來てからと云ふものは、一度も顔を見ないんですから、

此方も年を取りましたが、彼等も嘸年を取つたであらうと思つて、能く噂を爲て居りますよ。

して、何か松右衛門から頼まれてでもお出下さいましたか。』

云はれて町田は極悪しげな様子で、

『いえ、松右衛門さんから頼まれた理ぢやございませんが、折入つて旦那様にお願ひ申したい事があつて態々上京致したのでございます、委細はどうぞ此れを御覽下さいますると、詳しく認めてある理でございます。』

云ひつゝ懐中より、一通の書面を取出して奥方の前に進めた。

時子はそれを手にして見ると、松右衛門から良人に宛た書面であつたゆゑ、

『中には甚麽事が認めてあるか知りませんけれど、只今は屋敷へ參つて不在でとさいますから、モウ追付歸る時間です、暫くどうぞ待つて下さい。』

『では、御邪魔でございますが、暫く失禮致します。』

（五十三）

『えゝッ、宇治の松右衛門所から人が來た、シテ其人は奈何した。』

云ふは清川道恭である。

『彼方の室で貴方のお歸りを待受けて居ります。』

『甚麽用向の様子だ。』

『まだ何にも承はらないのでございますが、松右衛門から書面を寄來したを受取つて置きました。

云ひつゝ時子は、彼の町田が持參した書面を道恭に渡した、

道恭は、其書面を洩れなく讀終つて、又元の如く卷いて封筒に納め、そして町田の待受けつゝある室に入つた。

『君が町田君かね、定めて待疲れたであらう、私が清川ぢや。』

磊落さうな中に、浸すべからざる威嚴を備へた清川の風采を仰いだ町田は、何者にか打たれた如く心底から敬服の念を起して、

『これは旦那様でございますか、御不在中に伺ひまして失禮致しましてございます、私は町田長次郎と申しまして、山城伏見のものでございまますが、宇治の川口松右衛門から書面を貰ひまして、遙々旦那様を便つて上京致しましてでございます、委細は先程奥様に差上げて置きまして書面を御覽下されば明瞭致しまするが、どうぞ御厄介ではございませうけれど、何分にも宜しくお願ひ申します。』

『今書面は一遍讀むで見たが、文中に一度死んだ生命を蘇生したのだから、死ぬだけの辛い事も厭はず辛抱する本人の覺悟だと書て、書余は本人より聞取れとあるが、この一度死んだと云ふは、奈何して死んだのかな、隨分放蕩に身を持崩したとは書いてあるが、豈夫放蕩の結果生命を棄てにかゝつたのぢやあるまい。』

將に名判官の被告人を訊問する態度、町田は腋下に汗を流しつゝ、

『お恥かしい次第でございますが、眞個放蕩の結果一命を棄てましたのでございます。』

『放蕩の結果棄てた、ふむシテ見ると隨分墮落したものと見えるた、何にそれほど身を持崩したのだ……シテ又松右衛門がお前さんの生命を助けたとあるが、此の間の消息が薩張事情が解らん、一体奈何したのだ。』

『御不審は御有理でございます、實は斯樣な仔細でございます、手前の宅は恁う申すと何でございますが、伏見の町では一番古くから營業して居ります呉服店でございまして、父はモウ老年でもございますゆゑ、店の仕入萬端總て私がやつて居りましたので、今年の春でございました、神戸の舶來反物の問屋に參りまして其歸るさに、同じ瀛車に乘合せた女がございました、些と見ますると、それこそ華族樣のお嬢樣かとも思ふ程美しくもあれば、身裝も立派でございましたが、徒然のあまり何方からと云ふでもなく言葉を交しましたのが始りで、到頭妙な關係に